文芸資料研究所蔵絵入版本『栄花物語』翻刻・影印（二）

上野英子

本稿は横井孝・上野英子「文芸資料研究所蔵絵入版本『栄花物語』（一）略解題・翻刻・影印」（平成二十一年三月文芸資料研究所刊「別冊年報」XII所収）の続稿である。今回は全九冊中第四冊目（日蔭のかつら・つほみ花・玉の菊村・ゆふして・あさみとりの五巻を収載）を紹介する。翻刻要領はほぼ前回に準じるが、念のため凡例を掲げておく。

また参考資料として今回より「抄出状況一覧」を置くことにした。該書は、絵入版本であること以外に抄出本であることもその大きな特色のひとつであるが、これは通行本と比較した時の抄出状況をまとめたものである。現在入手しやすい校訂本文であるところの小学館の『新編日本古典文学全集　栄花物語』（底本は梅沢本）を用い、段落の区切およびその見出し語も同本によった。「抄出」欄では三種の記号を用いて各段落の抄出状況を示した。すなわち○印が該書でも確認できる部分、△印が部分的に確認できる部分、×印が全く確認できない部分である。

【抄出状況一覧】

段落	見出し	抄出	挿絵	備考
巻十	日蔭のかづら			
1	三条帝即位の儀	×		
2	冷泉院の病悩	×		
3	冷泉院崩御	×		
4	長和元年年頭	×		
5	三条帝と娍子の贈答歌	○		発語「さて」を省いて抄出する
6	人々、一条院を追想	○		
7	妍子の立后	○		
8	娍子とその周辺	○		
9	道長の奏上により、娍子の立后が決定する	○		
10	娍子の立后	○		
11	三条帝と娍子の贈答歌	○		
12	彰子の様子	○		
13	大嘗会御禊	○		
14	大嘗会・悠紀と主紀の風俗和歌	○		巻名歌掲載段

15	妍子の懐妊	○		
16	長和2年年頭	○		
17	妍子、東三条院に退出	○		
18	道長息顕信の出家	○		
19	道長、顕信と対面	○	1枚（13ウ）	道長、出家した顕信と対面の図
20	娍子の内裏参入	×		
21	道長息教通、公任女と結婚	×		
22	妍子の様子	×		

巻十一	つぼみ花			
1	源頼定と元子の密通、尊子の再婚	○		
2	妍子、斉信邸より土御門第に移る	○		
3	禎子内親王の誕生	○		
4	禎子内親王誕生の祝賀会	△		巻名詞「つほみはな」まで収録
5	乳母の決定	×		
6	行幸の用意、五十日の祝い	×		
7	三条帝、土御門第に行幸	×		

8	帝と禎子内親王の対面	×		
9	帝と妍子の語らい	×		
10	人々の加階	×		
11	妍子、内裏参入の準備。乳母と女房の出仕	×		
12	妍子、内裏に入る	×		
13	長和三年年頭	×		
14	三条帝、妍子のもとに渡御	×		
15	帝と妍子の贈答歌	×		
16	教通室の懐妊	×		
17	内裏炎上	×		
18	禎子内親王、内裏を退出	×		
19	穆子、禎子内親王と対面	×		

	巻十二　たまのむらぎく			巻名下に、省略部分の説明が入る
1	東宮敦成親王の書始め	×		
2	公卿たちの動静	×		
3	教通室、女児を出産	×		

4	隆家、眼病により太宰府赴任を望む	×		
5	倫子、宇治に遊ぶ	×		
6	禎子内親王袴着の用意	×		
7	隆円僧都逝去	×		
8	禎子内親王の袴着	×		
9	三条帝の病悩、譲位への思い	×		
10	隆家、太宰府に着任	×		
11	三条帝の女二宮、頼通への降嫁の話	×		
12	頼通室隆姫の様子	×		
13	頼通の急病	×		
14	貴船明神の出現	×		
15	具平親王の霊が出現、降嫁の中止を求める	×		
16	頼通平癒	×		
17	三条帝の病悩つづく	×		
18	永頼四女、頼通男を出産するが母子ともに死去	×		
19	新造内裏に遷御、皇后娍子の参入	×		
20	内裏、再び炎上。枇杷殿に遷御	×		

21	三条帝の歌	×																
22	三条帝の譲位、敦明親王の立坊	×																
23	敦明親王の様子	×																
24	後一条天皇即位の儀	×																
25	堀川院の様子	×																
26	敦康親王、具平親王女と結婚	×																
27	道長女寛子、東宮参内の噂	×																
28	三条院の造営	×																
29	五月五日、彰子と妍子の贈答歌	×																
30	大嘗会の準備	×																
31	一条尼上穆子の病悩	×																
32	穆子の逝去	×																
33	土御門第、法興院の炎上	×																
34	穆子の葬式	×																
35	三条院御所と枇杷殿の焼亡	×																
36	三条院と妍子、新造三条院に遷御	×																
37	大嘗会御禊	×																

38	後一条天皇大嘗会、悠紀主紀の和歌	×	巻名歌掲載段
39	藤原道雅、前斎宮と密通	○	発語「かかるほとに」を省き、収録
40	道長、左大臣を辞し、頼通内大臣に就任	△	年号のみ抄出し、道長辞任他は省略。
41	道長、摂政を頼通に譲る	×	
42	太皇太后宮そん子崩御	×	
43	三条院の病悩	×	

巻十三　ゆふして			巻名下に省略部分の説明あり
1	前斎院当子内親王の出家	△	巻名歌掲載段
2	三条院重体、出家	×	
3	三条院崩御	×	
4	三条院の葬送	×	
5	三条院の法事	×	
6	三条院の遺産処分	×	
7	中宮妍子、一条殿に遷御	×	
8	三条院の四十九日	×	
9	師明親王、出家をおもう	×	

10	妍子の御所、禎子内親王のありさま	○		
11	東宮敦明親王、退位をおもう	○		
12	東宮、道長と面会、退位が決定	○		
13	彰子、新東宮に敦康親王を推す	○		
14	敦良親王立坊、前東宮は小一条院となる	○		
15	敦康親王の思い	○		
16	倫子の石清水詣で	○		
17	源雅通の死去	○		
18	皇后娍子よろづの思い	○		
19	妍子の和歌	○		
20	五節	○		
21	賀茂行幸、妍子方の見物	○	2枚続1図（25ウ26オ）	後一条帝、賀茂へ行幸の図
22	妍子と彰子の贈答歌	○		
23	寛子方、婿取りの用意を始める	○		
24	小一条院と寛子の結婚	△		
25	露顕の儀	×		

26	堀川院の悲しみ	×		
27	小一条院、堀川院を訪う	○		
28	延子の歌	○		
29	延子、顕光の歎き	○		
30	寛子、妍子方の年末	○		
31	寛仁二年年頭	○		
32	後一条帝の元服	○		
33	頼通家の大饗、屏風歌	○	2枚続2図（31ウ32オ）（32ウ33オ）	大臣家大饗の図2種
34	延子の歌、顕光の様子	○		
35	源経房、妍子に三条院遺愛の笛をおくる	○		

巻十四	あさみとり			
1	威子の入内	×		
2	威子の容姿	×		
3	入内当夜の様子	×		

4	後一条帝と威子の仲	×		
5	道兼女、威子のもとに出仕	×		
6	一条宮の桜の歌	○		
7	妍子方の故三条院追憶の歌	○		
8	道長男長家、行成女と結婚	×		巻名歌掲載段
9	長家と行成女の仲	×		
10	長家、賀茂祭の使いに立つ	×		
11	行成大姫君のこと	×		
12	妍子除服、五月五日の贈答歌	○		
13	土御門第の再建、源頼光の奉仕	×		
14	秋、延子のうた	×		
15	初雪の贈答歌	×		
16	威子の立后	×		
17	教道女生子、真子の袴着	×		
18	寛子、小一条院の男宮を出産するも早世	×		
19	道長の法華八講	×		
20	敦康親王薨去	×		

21	人々の悲嘆と、道長出家の志し	×		
22	敦康親王の法事	×		
23	堀川院領有をめぐる元子・延子姉妹の不仲	×		
24	敦康親王室のありさま	×		
25	延子のなげき	×		
26	師明親王の出家	×		

【凡　例】

一、改行、改丁は底本通りとしたが、各行間の余白についてはその限りではない。

二、改丁箇所には記号を補って丁付けを記し、（一オ）」等と表記した。

三、字体は原則として通行の字体を用いた。

四、欠損・虫損・印字不鮮明箇所などは、

□□□語（栄花物）　かゝやく藤□（壺）

のように、□印で詠めない字数分を示し、他の資料で参照したものをパーレン付きでルビに表記した。

五、参考として脚注欄を設け、明暦二年版の本文と比校しておもな校異を挙げた。すなわち異同があった場合には、翻刻と同じ行の脚注に「絵入版本―明暦版本」の形式でそれぞれの本文を挙げておいた。

ただし、本格的な校本を目指したものではなく、あくまでも目安として設けたものに過ぎない。おおまかな目安として参照して頂ければありがたいと申し添えておく。明暦二年版本は国文学研究資料館所蔵本に依拠した。

栄花物語　四

日蔭のかつら
つほみ花
□□（主の）村菊
□□□□（ゆふして）
あさみとり

栄花物語　四

日蔭のかつら

世中にはけふあす后たゝせ給へしとのみいふはかん
の殿（妍子御堂女）にや又宣耀殿（娍子済時女）にやとも申めりかゝるほとに宣耀
殿に内（三条院）より
　春かすみ野へにたつらんとおもへともおほつかなさを（新千載恋四）
へたてつるかなと聞えさせ給へれは御返し
　かすむめる空のけしきはそれなからわか身ひと
つのあらすもあるかなと聞えさせ給へれはあはれと
おほしめさる中宮（上東門院）には年さへへたゝりぬるをつきせ
すあはれにおほしめされてたゝ御をこなひにて過
」（一オ）

させ給正月十五日（長和元年）一条院の御念仏に殿はらみなま
いらせ給へり月のいみしう澄のほりてめてたきに事
はてゝ出させ給とて殿（御堂）の御前
　君まさぬ宿には月そひとりすむふるき宮人（新千載哀傷）
たちもとまらてとの給はすれは侍従（行成）中納言
　去年のけふこよひの月を見しおりにかゝらん物と

世中には―さて世中には
とも―さも

めてたきに―めてたき

おもひかけきやはかなくてつかさめしのほとにも
成ぬれは世にはつかさめしとの丶しるにも中宮世中を
おほしいつる御けしきなれは藤式部
　雲のうへを雲のよそにて思ひやる月はかはらす
あめのしたにてあはれにつきせぬ御事ともなりや
宮の御前（上東門院）かへす〳〵おほしなけかせ給ておほとのこもり
」（一ウ）

たる暁かたの夢に院のほのかに見えさせ給ひけれは
　あふ事をいまはなきねの夢ならていつかは君を（新古今哀傷）
又はみるへきとていと丶御涙せきあへさせ給はす内（三条院）には
かむの殿（妍子）の后にゐさせ給へき御事を殿（御堂）にたひ〳〵
聞えさせ給へれと年比にもならせ給ぬ宮達あまた
おはします宣耀殿（娍子）こそまつさやうにはおはしま
さめ内侍のかみの御事はをのつから心のとかになと奏
せさせ給へはいとけうなき御心なり此世をふさはしからす
おもひ給へるなりなとゑ（怨）しの給はすれはさはよき日し
てこそは宣旨もくたさせ給へかなれとそうして出させ給
てにはかに此御事ともの御よういありなに事もそれ

藤式部―藤しきぶきやう

にさはり日なとのへさせ給へき御世の有さまならねは

」（二オ）

二月十四日后にゐさせ給て中宮（妍子）と聞えさすいそき
たゝせ給ぬその日になりぬれはつねのことなからも
いみしくやん事なくめてたし年比の女房たち上
中下のほとなとのわきかたうおもひ〳〵なりつる
ほとねたかりつる人々なとけふのきさみにはつかしけ
なる事ともおほかりなに事も心くるしけにうち〳〵
なつましけなりつる人もことかきり有けれはをり
ものゝからきぬをき年ころしたりかほなりつる人も
にはかにひらきぬなとにていと心やましけにおもひ
たるもおかしきにさはいへとおほ宰相の君なといふ
人をはおとゝなといひつけ給ひをよひをさしいひつれ
といとけさやかにえもいはぬえひそめのをり物の

」（二ウ）

からきぬなとをきてさふらふになにくれの人も心にくゝ
おもはれわれはとおもひたりつるもさしもあらすなと
しな〳〵わき給へるほとなとけにおほやけとならせ

たまひぬるはことなるわさなりけり心にはたれもやす
からすいひおもへとともかくもえけいせて心のうちに
のみむせわたるほともくるしけなり又さへき五位の
むすめなとの恥なきほとなりつるを蔵人なとにて
おものまいらするまかなひとりつきなとしてうたて
ゆゝしき事ともをいひおもへとつれなくもてなし
たるもいとおしけなり宮(妍子)の御前白き御よそひにて
大床子に御くしあけておはしまし御帳のそはの
しゝこまいぬのかほつきもおそろしけなり御前の御
くしあけさせ給へるほとはいとこそめてたうおはし
ましけれもとより御をもやうのふくらかにおかしけに
おはします物からよにめてたくおはしましけるなをさるへ
うおはしますなりけりとこそは見たてまつりけれ御
年十九はかりにそおはしましけるまいらせ給て三四年は
かりにそならせ給ぬらんかしとそをしはかりまうす人々有
大宮(上東門院)は十二にてまいらせ給て十三にてこそ后にゐさせ
給けれされと此御前(妍子)はすこしおとなひさせ給にけり御

」(三オ)

おはしましけれ—おはしましける

前に火たきやすへ陣やつくり吉上のこと〳〵しけに
いひ思ひたるかほけしきよりことおとりてさふらひの
おさともなさせ給ひさま〳〵こと〳〵しけに見えたりやかて
大饗いととうせさせ給へし大夫には大殿の御はらからの
よろつのあに君の大納言（道綱）なり給大かた宮つかさなとみな
えりなさせ給かくていとめてたうふた所さしつゝき
ておはしますをよのためしにめつらかなる事に聞え
させ内にはいまは宣耀殿の女御の御事をいかてとおほし
めせとすかやかに殿にはまうさせ給はぬほとに宣耀
殿にはなにともおほしめしたらぬに大かたの女房のえ
む〳〵につきて里人のおもひのまゝに物をいひおもふは
いかに〳〵御前におほしおはしますらんあさましき世中
に侍りやこれはさへき事かはなといとさかしかほにとふらひ
まいらする人々なとあるを此文をも又かうなむそれかれは
申つるなとかたり申す人を女御殿（城子）はなとかかうむつかし
ういふらんたとひいふ人ありともかたらてもあれかしこゝ
」（三ウ）

」（四オ）

かほ―（ナシ）
おさとも―ちやうども
聞えさせ―きこえさす
御事―こと／いかてと―いかでかと
たらぬに―たらぬほどに

にはよろつおもひたえていまはたゝ後の世の有さまのみ
こそわりなけれなと物まめやかにおほせらるれはさこそあ
れ御心のひかませ給へれは物のあはれ有さまをもしらせ
給はぬとさかしうそ聞えさせけるかゝるほとに大殿の御心
なに事もあさましきまて人の心の中をくませ給に
よりしは〳〵参らせ給てこゝらの宮たちのおはします
に宣耀殿のかくておはしますいとふひんなる事に
侍りはやう此御事をこそせさせ給はめと奏せさせ給
へはうへこゝにもさはおもふを此殿上のをのこともものむかし
物かたりなとをの〳〵いふを聞はうとねりなとのむす
めもむかしは后にゐけりいまも中比も納言のむすめ
の后にゐたるなんなきといふをはいかゝはすへからんとこそ
」（四ウ）
きけとの給はすれはそれはひか事にさふらふなりいかて
かさらは故大将（済時）をこそは贈大臣の宣旨をくたさせ給はめ
と奏せさせ給へはさるへきやうにをこなひ給へしとの給は
すれはうけたまはらせ給て宮におほせこと給はす
さへき神事あらん日をはなちてよろしき日して小一条

中を―うちを

それは―（ナシ）

さるへき―さへき

神事―かみこと

の大将それかしの朝臣贈太政大臣になしてかのはかに
宣命よむへしとの給はすれは弁うけ給ひぬ四月に
さへき所々の祭りはてゝよき日してかの大将の御はかに
勅使くたりてやかて修理大夫（済時息道任）そひて物すへくあれはかの
君もいてたち参り給よき御子もたまひて故大将の
かくさかゆき給をそ世の人めてたきことに申けるかの
御いもうとの宣耀殿の女御（芳子）村上の先帝のいみしき物に
」（五オ）
思ひ聞えさせ給けれと女御にてやみ給にきおとこ宮（永平）ひとり
うみ給へりしかともその宮かしこき御中より出給へるとも
見え給はすいみしきしれ物にてやませ給にけりその小
一条のおとゝ（師尹公）の御むまこにて此宮のかうおはします事世
にめてたき事に申おもへりさて四月廿八日后にゐ給ぬ
皇后宮と聞えさす大夫なとにはのそむ人もことになきに
やさやうのけしきやきこしめしけむ故関白（道隆公）殿の出雲の
中納言（隆家）成給ぬ宮司なときほひのそむ人なく物はなや
かになとこそなけれよろつたゝおなしことなりこれに
つけてもあなめてたや女の御さいはひのためしには此宮を

の給はすれは―の給はす
さへき―（ナシ）

給けれと―給ければ
給にけり―給にける

こそしたてまつらめなとき、にくきまて世には申まつ
は大殿もまことにいみしかりける人の御有さまなり女の
」（五ウ）
御さいはひの本には此宮をなむし奉るへきおやなとにも
をくれ給てわか御身ひとつにて年比になり給ぬるに又
けしからすひんなき事しいてたまはすまつはこゝら
おほくおはする宮達の御中にしれもの、ましらぬ
にてきはめつかしいみしき村上の先帝と申しかと
かの大将のいもうとの宣耀殿の女御のうみ給へりし
八宮（永平）こそは世のしれもの、いみしきためしよそれに此宮
達五六人おはするにすへてしれかたくなしきかなき也
なとこそは申させ給にまいてよの人は聞にくきま
てそ申けるいまは小一条いかてつくりたてむとおほし
めすみかともいまそ御ほいとけたる御心ちせさせ給らんかし（三条院）
かくよろつにめてたき御有さまなれとも皇后宮（城子）には
」（六オ）
たゝおほつかなさをのみこそはつきせぬ事に思しめ
すらめおなし御心にやおほしめしけん内より（三条院）

なり給ぬるに—なり。御ぬるに

女御の—（ナシ）

給に—給

いまそ—いまは

うちはへておほつかなさをよと、もにおほめく身
ともなりぬへきかなとある御かへしに
　露はかりあはれをしらん人もかなおほつかなをさて
もいかにとよろつの中にも姫君の御ゆかしさをそ
おほしめしける大宮（上東門院）には院（一条）の御服なともはてにたれは
つきせすのみおほしなけかせ給東宮（後一条院）のうつくしう
をよすけさせ給を明くれ見奉らせ給はぬもあはれに口おし
うおほさるゝに三の宮（後朱雀院）のいみしううつくしうまきれあり
かせ給にそすこしおほしなくさめけるはかなく秋（長和元年）は過て
冬にも成ぬれは内わたりは中宮（妍子）の御かたの衣かへなとの有
」（六ウ）

さまも物けさやかに月日のゆきかふほともしられてめて
たかりける立ん月の大嘗会御禊なといみしう世にいそ
きたちにたり内にも御服たちぬる月にぬかせ給て
冷泉院の御はてもせさせ給ていまは此事をいみしき
ことにのゝしらせ給女御代には大殿（御堂）の内侍（威子）のかんの殿出させ
給女御代の御車二十りやうそあるをまつ大宮より三つ中（妍子）
宮より三つ車よりはしめていといみしうのゝしらせ給ふ

姫君―ひめみや

御禊―御はらい

冷泉院―れいぜんゐん

こたひの物見には此宮々の御車なんあへきとの、しれはい
つしかと人まちおもへるにいまはその日になりて女御代
の御車のしさまよりはしめあさましきまてせさせ給へり
その車の有さまいへはをろかなりあるはやかたを作りて
ひはたをふきあるはもろこしの舩のかたを作りてのり

」（七オ）

人の袖より初てそれにやかてあはせたり袖にはをき
口にて蒔絵をしたり山をたゝみ海をたゝへすちをやり
すへて大かたひきわたしいくほとめもかゝやきてえもみ
わかすなりにしか車ひとつかきぬのかすすへて十五そ
きたるあるはからにしきなとをそきせさせ給へる此世界
の事とも見えすてりみちてわたるほとの有さまをし
はかるへし殿はら公達の馬車弓やなくひまての有
さまこそ世にめつらかにまた見聞えぬ事ともなりけれ
過にしかたはいはしいまゆくすゑもいかてかゝる事はと見え
たり冬の日もはかなくくれて大嘗会のいそきせさせ
給されとその日はたゝうるはしうそある悠紀（ユキ）の方は
大中臣能宣か子の祭主輔親つかうまつる主基（スキ）の方は

こたひの―こたみの

ひはたをふき―ひはだぶき

袖より―はへなりより／それにやかて―それにやぞ

ひきわたし―ひきわたして

前加賀守源兼澄なり此人々すけちかはよしのふか子なれ
はとおほしめしたりかねすみは公忠の弁のすちなりなと
おほしめして歌のかたにさもあるへき人ともをあてさせ給
へるなるへし悠紀の方いなつき歌さかたのこほり輔親
　山のことさかたのいねをぬきつみて君か千とせの
はつほにそつく御神楽の歌おなし人
　おほやしま国しろしめす初めより八百万代の
神そまもれる参入音声たかみくら山
　万代はたかみくら山うこきなきときはかきはに
あふくへきかな楽の破の歌しき地
　大宮のしき地そいとゝさかへぬる八重のくみかき
つくりかさねて楽の急の歌かな山
」（七ウ）

かな山にかたくねさせるときは木のかすに生ます
国のとみくさまかて音声やす川
　すへらきのみよをまち出て水すめるやすの川波
のとけかるらし又次の日の参入音声なからの山
」（八オ）

方―かたの／いなつき歌―いねつきうた

参入音声―まいり音声

急の―いそきの

生ます―おいます

天地のともに久しき名によりてなからの山の
なかき御世かな楽の破の歌よしみつ
よしみつのよきことおほくつめるかなおほくら山
のほとはるかにて楽の急の歌
ゆふしての日かけのかつらよりかけてとよのあかり
のおもしろきかなまかて音声やすらの里
もろ人のねかふ心のあふみなるやすらの里のや
すらけくして

」（八ウ）

主基の方いなつき歌おほくら山かねすみ
二葉よりおほくら山にはこふいね年はつむとも
つくるよもあらし御神楽の歌なかむら山
続後拾遺賀
君か御代なかむら山のさかき葉を八十氏人の
かさしにはせむ辰の日の楽の破の歌たままつ山
天つ空あしたにはるゝはしめにはたままつ山
のかけさへそそふおなし日の楽の急の歌いなふさ山
としつくりたのしかるへき御代なれはいなふさ山の
ゆたかなりけりおなし日参入音声さゝれ石山

御神楽の歌―御かくらうた

なりけり―なりける

かすしらすさゝれ石山ことしよりいはほとならん
ほとは幾世そおなし日のまかて音声千とせ山
うこきなく千とせの山にいとゝしくよろつ代そふ
」（九オ）
る声のする哉巳の日の楽の破とみつき山
君か代はとみつき山のつき〳〵にさかへそまさむ
万代までにおなし日の楽の急の歌なかむら山
万代をなかむら山のなからへてつきすはこはん
みつきものかなおなし日のまいり音声とみのを川
あめのしたとみのを川の末なれはいつれの秋か
うるはさるへきおなし日のまかて音声ちゝ川
にこりなく見えわたるかなちゝ川のはしめてすめ□（る）
とよのあかりに此おなし折の御屏風の歌なとあれ
とおなしすちの事なれはかゝす去年よりしていみし
くのゝしりつる事ともゝはてゝ内（三条院）には心のとかにおほし
めさるゝにも麗景殿（兼家公女綏子）淑景舎（定子妹）なとのおはせましかはと
」（九ウ）
おほし出させ給かくて中宮（妍子）いかなるにか例ならすなやまし

かすしらす―かずしらぬ
うこきなく―うこきなき／代―世

うおほされけり殿の御前おほしなけかせ給に例せさ
□(せ)給事たちぬる月此月さもあらて過ぬいかなるにか□(と)
□□(人々)おほつかなくのみ聞えさするに物なとつゆきこし
めさぬはたゝならぬ御心ちにやとおほしめすに御乳母
の内侍のすけあやしうたちぬる月おほつかなくて
やませ給にし事なとのおはしますにやと申給まこと
にたゝならぬ御けしきにおはします殿の御前にも内
にもいとうれしきことにおほしめして殿の御前なにか
ものきこしめさすともおはしましぬへき御心ちなりと
てよき日してさま〳〵の御祈りとも初めさせ給ふしはす
にも成ぬ世中心あはたゝしう内よりはしめ宮々の

」(十オ)

御仏名にも例の仏名経なと誦する声もおかしきに
ふるしら雪とともにきえなむなともあはれなりはかなく
くれぬれはついたちには元日の朝拝よりはしめさま〳〵
にめてたし殿上のかたにはしん(後)とり(取)といひていとまさ
なうこちたきけはひとも聞えたりついたちより初め
事ともいみしうしけゝれはさま〳〵いはひ事とも

にてくれぬへし正月にそ宮の御前出させ給へきその
日女房のなりなとあさやかにせさせ給さてその夜に成
ぬれはきしき有さまなとおもひやるへしつねの行
啓せさせ給めてたしと有つれとかうやは見えさせ給□(つ)
る御こしのかたひらより初てよろついみしうさやかに
めて□(た)し京極殿は方ふたかれはえおはしまさて□(東)

」（十ウ）

三条院に出させ給ぬれは内にも御心さしいとあやにく
なるまておほつかなくそ思ひ聞えさせ給宮には殿おはし
ましてよき日して大般若観音経薬師経寿命経
なとの御読経をの〳〵不断に初めさせ給ふ法華経は
はしめよりせさせ給へはなりけり年比山にこもりて
里へも出ぬ僧たつねめし出て此御読経にさふらはせ給ふ
おほやけよりは長日の御修法はしめさせ給さま〳〵の
御祈りともいみしかゝるほとに殿(御堂)の高松(高明公女)殿の次郎君
右馬頭にておはしつる十七八はかりにやとそいかにおはし
けるにか夜中はかりに横川の聖のもとにおはして
われ法師になし給へ年比のほいなりとの給ひけれは

給―給に
初めさせ―せさせ
さふらはせ―さふはせ
次郎君―二郎君
おはし―おほし

聖大殿のいととうときものにせさせ給にかならす

」（十一オ）

□(か)んたう侍りなむと申てきかさりけれはいと心きた
なき聖の心なりけり殿ひんなしとの給はせんにも
かはかりの身にてはくるしうやおほえんわろくも有ける
かなこゝになさすともかはかり思ひたちてとまるへきならす
との給はせけれはことはりなりとうちなきてなし奉りに
けりひしりの衣とりきさせ給てなをしさしぬきさ
るへき御そなと皆聖にぬき給はせてわたの御そひとつ
はかり奉りて山に無動寺といふ所に夜のうちに
おはしにけり横川の聖あやしき法師ひとりをそ
そへ奉りにけるそれを御供にてのほり給ぬ此大徳な
とやいひちらしけん日の出るほとに此殿うせ給へり
とて大殿よりおほくの人をわかちてもとめ奉らせ給

」（十一ウ）

によ川の聖のもとにて出家し給へるといふ事を聞し
めして横川のひしりをめしにつかはしたるにかしこま
りてとみにもまいらすいとあるましき事なりま

出る—いづる
わかちて—あかちて

聞しめして—きこしめしてあはれにかなしういみ
じとおほしめして

いれ〳〵とたひ〳〵めされて参りたれは殿の御前なく〳〵
ありさまとはせ給へは聖申せしやうの給はせしさま
かう〳〵いとふひんなることをつかうまつりてかし
こまり申侍ると申せはなとてかともかくも思はむ聖
なさすともさはかり思ひたちてはとまるへき事ならす
いとわかき心ちにこゝらの中をすてゝ人しれす思ひ
たちけるあはれなりけることなりやわか心にも増りて
有けるかなとて山へいそきのほらせ給高松殿のうへは
すへて物もおほえ給はす殿おはしませはいくその人々か
きほひのほり給ふいつしかおはしましつきて見奉らせ
給へは例の僧達はひたいのほとけちめ見えてこそあれ
これはさもなくてあはれにうつくしうたうとけにて
おはす猶見奉らせ給に御涙とゝめさせ給はすそこらの
殿はらいみしう哀れに見奉らせ給殿の御前さてもいかに
おもひたちし事そなに事のうかりしそわれをつらし
とおもふ事や有し司かうふりの心もとなくおほえしか
又いかてかとおもひかけし女の事や有しこと〳〵はしら
」（十二オ）

おはす―（ナシ）
おもひたちし―おもひたりし

す世にあらんかきりはなに事をか見捨てはあらんと思
に心うくかく母をも我をも思はてかゝる事との給ひつゝ
けてなかせ給へはいと心あはたゝしけにおほしてわれも
うちなき給てさらになに事かおもふ給へんたゝおさな
」（十二ウ）
く侍しおりよりいかてと思ひ侍しにさやうにも思しかけぬ
事をかうまてしなさせ給にしかは我にもあらてありき侍し
なり誰にも〳〵中〳〵かくこそつかうまつる心さしも侍ら
めと申給さてやかてそこにおはしますへき御心をきて有へ
き事ともの給はす宮々の御使なとすへていと物さはかし殿
の御前なく〳〵おりさせ給ぬ御さうそくいそきして奉らせ
さま〳〵の物とも奉らせ給高松殿のうへなく〳〵御その事
いそかせ給殿はら宮々の奉らせ給つるはきよらなりとてみな
天台の僧ともにくはらせ給高松殿より奉らせ給へる御そを
そ御れうにはせさせ給けるいてやいまは布をこそとまて
そおほしめしける殿よりも宮よりもみな御具をきて奉らせ
給あはれにいみしうありかたき御出家になん

なに事か―なにごとをか

事を―ことをかくとまうさんもいとはづかしうは
べりしほとに／我にも―あれにも
かくこそ―かくてこそ

給―たまひ

」（十三オ）
」（十三ウ）

（挿絵）

つほみはな

一条院うせさせ給て後女御更衣の御有さまともさま〳〵
に聞ゆるに承香殿の女御（元子）に故式部卿（為平）の源宰相頼□（定）の君
しのひつゝかよひ聞え給ほとに右のおとゝ（顕光公）聞給てま□（こ）
とそらことあらはし聞えんとおほしけるほとに御めに
まことなりけりと見給てけれはいみしうむつからせ
給てさはかりうつくしき御くしを手つから尼になし
奉り給にうき事かすしらす見えたりあさましう
あやしき事に世の人も殿のうちにもいひさはくほ
とにその後もなを忍ひつゝかよひ給けれはそのたひは
いつちも〳〵おはしねとあれは女御の御めのとゝあるは実
誓僧都といふ人の車やとりなりその家にわたり
」（十四オ）
給ぬ宰相もさるへきにこそと思ひつゝをろかならすかよひ給
ほとにをのつから御くしなともめやすくなりもていく
あやしうひか〳〵しき事に世の人もおもひ聞えたりおなし

故式部卿の―こしきぶきやうみやの／源宰相―源宰相のきみ

世の人も―よ人も

きわか公達といへともこれは村上の四の宮源帥殿（為平）（高明公）の御むす
めのはらなれはいと物きよく物し給をあやにくに此殿（顕光公）の
給ふをそかへす〳〵あやしき事に人きこゆめる又くらへや
の女御（道兼公女尊子）と聞えしには母の藤三位（師輔公女繁子）いまの宣耀殿（城子）の御はらから
の修理のかみ（通任）をそあはせ聞えためるかくて中宮（妍子）もたゝにおはし
まさねは出させ給に斉信大納言の大炊御門の家におはし
まいて月比にならせ給ぬれはそこにて御子生れ給へき
にやなとおもふほとに此比土御門殿にわたらせ給へけれは
家あるし（斉信）殿なにわさをとおほしいそかせ給それも東
三条院に出させ給へりしをそこの焼にしかは内（三条院）もわたら
せ給へるなりけりさて土御門殿にはわたらせ給に宮（妍子）の御
をくり物になにわさをしてまいらせんとおほしけるに
なに事もめつらしけなき世の御ありさまとなりに
ためれは中ゝなりとて村上の御時の日記をおほき
なるさうしよつに絵にかゝせ給てことはは佐理の兵部
卿のむすめ（懐平室）の君と延幹の君とにかゝせ給てうるはし
き箱一よろひに入させ給てさへき御手本なとくして

なと―と

内も―こちに

給へる―給つる

ことはは―（ナシ）

延幹の君―近幹きみ

奉り給けれは宮(妍子)はよろつの物に増りてうれしくおほし
めされけり女房の中にはおほいなるひわりこをしてしろ
いものたき物なとをそ入て出し給へりけるかくてわた
らせ給てそこにて御祈りともを大宮(上東門院)のおりの事とも

」（十五オ）

みなせさせ給いとわりなきほとのありさまにていとおそ
ろしくいかに〳〵とおほしさはかせ給まことやかの大納言
の御もとにさるへき家司なり殿位(斉信)なとまさらせ給けり
いとめいほくある御さまなりかくていかに〳〵と御心をつくし
ねんし聞えさせ給ほとに長和二年七月六日の夕かたより
御けしきあるさまにおはしませは御いのりの僧とも声
をあはせてのゝしる加持まいりうちまきしさはく内
にも聞しめして御使しきりにまいる御はらへのほとい
みしくなりあひたり月比いみしかりつる御祈りのしるし
にやいぬの時はかりにいとたいらかに御子(陽明門院)生れ給ぬいま一
しきりのとよみのほとあさましきまておとろ〳〵しき
に僧なといとくるしからぬほとにならせ給ぬよにめて

」（十五ウ）

家司―いゑつかさ

ほと―ほとに

たき事なるにたゝ御子なにといふ事聞え給はぬは女
にておはしますにやと見えたり殿の御前いと口おしく
おほしめせとさはれこれをはしめたる御事ならはこそ
あらめ又もをのつからとおほしめすにこれもわろからす
おほしめされてこよひのうちに御ゆとの有へくのゝしり
たり内にはけさやかに奏せさせ給はねとをのつからきこし
めしつ御はかしいつしかもてまいれり例は女におはし
ますには御はかしはなきをなに事もいまの世の有さま
はさま〳〵の例をひかせ給へきにあらねはことのほか
にめてたけれはこれをはしめたるためしに成ぬへし
御使の祿よめにもけさやかに見ゆるつるの毛衣のほと
も心ことなり御乳つけには東宮（後一条院）の御めのとのあふみの内侍
」（十六オ）

をめしたりそれは御めのとたちあまたさふらふ中に
もこれは殿のうへ（倫子）の御めのとこのあまたの中のそのひとり
なり大宮の内侍なりけりさて日比さふらふへきに宮
の御ゆとののきしき有さまおもひやり聞ゆへし五位
六位御つるうちに廿人めしたり五位は蔵人五位をえら

なにと―なにかと／女にて―をんなに

の、しりたり―の、しりたつ

いつしか―いつしかと

ことのほかにめてたけれは―（ナシ）

なり―なる

はせ給へり女におはしませは内にもいますこし心ことに
をきて聞えさせ給たゝおなしくはとたれもおほさるへし
されと東宮の生れ給へりしを殿の御前の御初むまこにて
栄花の初花と聞えたるに此御ことをはつほみ花とそき
こえさすへかめるそれはたゝいまこそ心もとなけれ時い□(た)りて
ひらけさせ給はんほとめてたし
」（十六ウ）

玉のむら菊

長和五年正月廿九日三條院御譲位二月七日後一条院御
即位敦明親王東宮に立給事此巻の初め有略之

前斎宮(三条院皇女当子)のほらせ給て皇后宮(城子)におはします宮せはし
とて又しらせ給所にそおはしまさせ給ひける年比に
おとなひさせ給へる御有さまもいみしうをろかならす見
奉らせ給へれと外にしはしとておはしまさせ給ほとに
帥殿(伊周公)の松君の三位の中将道雅の君いかゝしけん参り
かよふといふ事世に聞えてさゝめきさはけは宮いみし
う思しなけかせ給ふほとに院(三条)にもきこしめしてけり

おとなひさせ―おとなひはてさせ
外に―ほかに
帥殿―帥どの、／三位の―三位

こと〳〵ならす斎宮の御めのとやかてかの宮の内侍に
なさせ給へりし中将のめのとのしわさなるへしとて
」（十七オ）

院いみしうむつからせ給てやかてなかくまかてさせ給つ
宮（当子）は皇后宮むかへ奉らせ給て院にはいと、しき御心ちに
是を聞しめし、よりいと、増らせ給やうにおほされて宮達
ひまなく御使にて皇后宮院に御文しきりなり斎宮我
にもあらすいみしうおほしめさる中将の内侍はやかて□（お）
はせけるま、にかの道雅の君むかへとりてわか御もとにいみし
ういたはりてをきたりと聞しめす皇后宮にはめさまし
うおほしめされて人しれすいみしうおほしなけかせ給
けりまことそらことしりかたき御事なれと世にかく
もり聞えたるに院の御けしきのいといみしきなりか
の在五中将の心のやみにまとひにき夢現とは世人さた
めよなとよみたりしもかやうの事そかしそれはまた
」（十七ウ）

まことの斎宮にておはせし折の事なりされと□（是）□（は）
前斎宮と聞えさすれはあなかちにおそろしかるへき事

かの宮の―みやの
なさせ給へりし―て候
やかて―（ナシ）
御心ちに―御こゝち
増らせ給やうに―まさるやうに
しきりなり―しきれり／我―（ナシ）
□（お）はせける―おはせ給ける
御もとに―もとに
御事―御ありさま
なと―と
前斎宮―前の斎宮

ならねと院のいときはたけくおほしの給はするかいと
かたはらいたきをなん皇后宮いといみしうみたれたるに
宮々の御けしきもいといみしきに東宮（小一条院）もわりなう心や
ましけにおほしみたるへしする事なき年たにはかな
く明くるゝにまいていみしき大事ともの有つれは年も
かへりぬことしをは寛仁元年ひのとの酉の年といふめり

ゆふして

此巻三條院崩御略之

かくて前斎宮（当子）いとわかき御心ちに此事聞にくゝおほ
さるれはいかにせんと人しれすおほしなけかれて御覧せし
いせのちひろのそこのうつせ貝のみ恋しくおほされて
しほたれわたらせ給わりなき御ぬれきぬも心くるしき
に三位中将（道雅）は跡たえてわりなくのみ思ひみたれて風につ
けたりけるにやかくてまいらせたり
榊葉（後拾遺恋三）のゆふしてかけしそのかみにをしかへしても
にたるころかな人しれぬ事ともおほかめれと世に聞え
ねはまねひかたし又高欄にむすひつけ給へりける

」（十八オ）

御けしきもいといみじきに―御けしきどもいみじ

おほかめれと―おほかりけれど
給へりける―たりける

同
みちのくのをたえの橋や是ならんふみゝふま
すみ心まとはす宮はふるのやしろのなともおほされて
あはれなる夕くれに御手つから尼にならせ給ぬ又哀に
むかし物語に似たる御事ともなり
○三条院后妍子御産殿女中宮は一条殿にて明暮の御をこなひにて過させ給月
日の過るにつけても姫君（陽明門院）のあはてありかせ給にあや
うすものなとも奉らてたゝのきぬを御あこめうす色
なとにてありかせ給御くしなかくてちいさきわらはへ
なとのやうにておはしますもあはれにいみしき物
におもひ聞えさせ給へりし物をと御めのとたちかけ
奉らぬおりなう恋なき奉るひめ宮みゝすかきにせ
させ給へるこれいかてあての御（三条院）もとに奉らんとの給はする
につけても時鳥にやつけましとあはれに御覧せら
れけりあてはまろをは恋しとはおほさぬかなとかいと
久しくわたらせ給はぬなとかきつゝけさせ給も涙
とゝめかたう御前にもおほしめしさふらふ人々も思へり
宮達おほつかなからすわたり見奉らせ給ひけり東宮（小一条院）
」（十八ウ）

尼に―（ナシ）／又―（ナシ）
過る―すぐる／姫君―ひめみや／給に―給
御あこめ―あこめにて
なとのやうにて―のやうに
御覧せられけり―御らんぜらる
御前―御まへ
給ひけり―けり

よりもはかなう御あそひ物なとまつ奉らせ給殿の御前
一条殿の御つれ〳〵におはしますらんとて我も御とのゐ
せさせ給その殿はらもつねにまいらせ給へう申させ給
院のおはしまさぬはかりこそ有しにかはらせ給へれと
大かたの御ありさまは殿のおはしませはおなしことになん
そのおりの殿上人心よせの殿はらなとはつねに参り給
かゝるほとに東宮なにの御心のもよほしにかおはしま
すらんかくてかきりなき御身をなにともおほされすむ
かしの御忍ひありきのみ恋しくおほされて時々に
つけての花紅葉も御心にまかせて御覧せしのみ恋し
くいかてさやうにても有にしかなとのみ思しめさるゝ御心
よるひるきうにおほさるゝもわりなく　皇后宮（小一条院后藤子　小一条院□）　に一生
はいくはくも侍らぬに猶かくて侍こそいといふせく侍れ
さるへきにや侍らんいにしへの有さまに心やすくてこそ

」（十九オ）

」（十九ウ）

はかなう―はかなき
一条殿の―一でうみや／御つれ〳〵に―つれ〳〵
に／我も―われもつねに
その―（ナシ）
はかり…給へれと―かたこそいみじけれども
御心のもよほしにか―御こゝろにか
つけての―つけて／御覧…恋しく―御らむぜんと
のみなを
のみ―（ナシ）／思しめさるゝ―おほさるゝ
おほさるゝもわりなく―わりなくて
侍らん―はべるらん／心やすくて―こゝろやすく

あらまほしく侍れなとおり〳〵に聞えさせ給へは宮(皇子)は
いと心うき御心なり御物のけのおもはせ奉るならん故(三条)
院のあへきさまにすへ奉らせ給ひし御事をいかにおほし
てやかて御あとをもつかす世のためしにもならんと
おほしめすそいと心うき事なりなとつねにはいさ
め申させ給て御物のけのかくは思はせ奉るそとて所々
に御祈りをせさせ給ふおほし(皇子)あまりてわかやかなる殿
上人の申あくからすならんとてめしおほせなとせさせ
給されと殿の御前にさるへき人してかうやうになんと
まねひ申させ給殿の御前いとあるましき御事なり
」(二十オ)

さは故院の御つきはなくてやませ給へきかはいみしかりし
世の御物のけ(元方ノ霊)なれはそれかさ思はせ奉るならんとの給はせ
て聞いれさせ給はぬをいかて対面せんとたひ〳〵聞えさせ
給へは殿まいらせ給へりおほつかなきよの御物かたりなと
聞えさせ給てつきになを身のすくせのわろきにや侍らん
かくうるはしき有さまこそいとむつかしけれいかてはり

あらまほしく侍れ—はべらまほしけれ／給へは—
給へれば
すへ—しすへ
御あとをも—御あとを／ならんと—ならんとは
いと—（ナシ）／なとつねには—とつねに
かくは—かうは／奉るそ—たてまつるなり
あまりて—あまりては
なんと—なと
かは—か
世の—（ナシ）
聞いれ—さゝいれ
つきになを身の—なをこの／侍らん—はべるらん
かく—かけ

侍りて一院といはれて侍らんと聞えさせ給へはさらに
いとあるましき御心をきてにおはします故院のよろ
つに御うしろみつかうまつるへきよしおほせられし
かはみなさおもふ給へなからえさらぬ事のおほく侍れは
内（後一条院）にも当代いとおさなくおはしませはよろついとま
なくさふらひてなんなかについて此一品宮（陽明門院）の御ためを
」（二十ウ）
おもひ給ふれは心のとかに世をもおほしたもたせ給ておはし
まさんこそたのもしううれしうさふらふへけれたゝこ
れはこと〳〵ならじ御物のけのおほさするなめりと申させ
給へはなてう物のけにかあらんたゝもとよりあそひの
心のみありならひにけれはかくてあるかいとむつかしう
おほえて心にまかせてあらんとおもひ侍るなりそれになを
えあるましくおほされはもとのほいもありさるへきさ
まにてあらんとなんおもふと申させ給へはいとふひんなる事
なり出家とまておほしめされはいとことのほかに侍りさらは

侍らん―はべるらん
いとあるましき―あさましき／故院の―故院
おもふ給へなから―おもひ給ながら／事の―こと
／侍れは―はへる
いとまなく―いとまなう
ついて―つきて
こそ―のみこそ／たのもしううれしう―たのもし
くうれしく
おほさする―おぼさる、
かくて―かく／むつかしう―むつかしく
あらんと―ならんと
あるましく―あるましう
給へは―給

さるへきさまにつかふまつるへきにこそはさふらふなれ一
院にておはしまさんも御身はいとめてたき事におはし
ますよにめてたき物は太上天皇にこそおはします
」（二十一オ）
めれなとよく御心のとかに聞えさせ給てまかて給ぬその
まゝにやかて大宮（上東門院）にまいらせ給てかう〳〵のことをなん東
宮たひ〳〵の給はすれとさらにうけひき申さぬにめし
ておほせられつるやうなとこまやかに申させ給摂政殿（頼通公）
□（も）おはします人のこれをとかく思ひ聞えさする事なら
はこそあらめわかたはやすくならせ給へる御心なれは一院
とて心にまかせてあらんとおほしめしたるもいとあらまほし
き事なりさても東宮には三の宮（後朱雀院）こそはゐさせ給はめ
□（と）申させ給へは大宮けにそれはさることに侍れと式部卿（敦康）の
宮さておはしまさんこそよく侍らめそれこそ帝にも
すへ奉らまほしかりしかと故院（一条）のせさせ給し事なれ
はさてやみにき此たひはかの宮のゐさせ給はんは故院の
」（二十一ウ）
御心の中におほしけんほいもあり宮の御ためにも

こそはさふらふなれ—こそはへるなれ
太上天皇—太上皇
御心—こゝろ／まかて—まかてさせ
まいらせ—いらせ
おほせられつる—の給ひつる
たはやすくならせ—たやすくならはせ
心に—御こゝろに／いと—（ナシ）
三の宮—三宮
式部卿の宮—しきぶきやうみやの
中に—うちに

よくなん有へきわか宮は御すくせにまかせてもあらはや
となむ思ひ侍ると聞えさせ給へは大殿けにいと有かたく
あはれにおほせらるゝ事に侍れと故院もこと〳〵なら
すたゝ御うしろみなきによりかしこうおはすれとか
やうの御有さまはたゝ御うしろみからなり帥中納言（隆家）た
に京になきこそなと猶あるましき事におほし
さためつかくて八月九日東宮（後朱雀院）たゝせ給ぬはしめの
東宮をは小一條院と聞えさす院いとおほしめすさまに
やさしくおほしめされて廿人の御随身えりとゝのへ
させ給のるへき馬鞍まてきよらをせさせ給故院（三条）の
御随身ともの世中をいとあえなくおもひたりつる□（に）
」（二十二オ）

さるへうひゝしきなとはみな参りあつまりぬ殿上人の
さるへくつかひつけさせ給へる人々なといみしう興ありと
おもへり皇后宮（媞子）いとあかぬことにくちおしうおほせと
又一院とて年官年爵えさせ給蔵人判官代何くれ
のさためあるにつけてもあしくはおは□（し）まさすいまめ
かしう御心をやりあらまほしけなるかたは月比の御あり

まかせても—まかせて
大殿—との／有かたく—ありがたう
御—（ナシ）
御うしろみから—うしろみから
猶—（ナシ）
廿人—十二人
まてきよらを—のそろへを
なと—（ナシ）
おもへり—おもへる／いと—（ナシ）
何くれの—なにくれ
御心をやり—御こゝろやり

さまに増らせ給へりさは故院の御つきはかくてやませ
給ひぬるにやと思しめすほとそいとかなしかりける東宮(後宋重院)
の御めのとたちつゐの御事なからたちまちの事とは
思ひかけさりつるにあさましくうれしきにせむかた
なし東宮大夫には大殿(御堂)の高松殿の腹の中納言(頼宗公)成給ぬ
権大夫には法住寺の大臣殿の兵衛督公信の君成給ぬ
」(二十二ウ)
傳には閑院の右のおほい(公季公)殿成給ぬ宮司帯刀なとは我も〳〵と
のそみ申せと大殿えらひなさせ給つよろつあなめて
たと見えさせ給帯刀ともいと物きよき人の子ともを
なさせ給つなを大宮の御さいはひはめてたくおはします
式部卿(敦康)宮此かたにはむけに思したえにしかと此たひの
ひまにはかならすたちいてさせ給ぬへかりつるを御すくせ
をはしらせ給はすとも猶あやしうとはいかてかおほしめさ
さらん世と、もにはれ〳〵しからぬ御けしきも心くるしう
なん前の東宮(小一条院)の帯刀とも手にすへたる鷹をそらしたる
なといふやうに思へしいまの東宮のをのそみ申すたくひ

ほとそ—かたぞ
御事—こと
思ひかけさりつるに—おもはざりつるに
高松殿の—たかまつの／中納言—大なごん／成給
—なり給ぬ
督—かう／成給ぬ—なり給
傳—東宮傳／帯刀—たてわき
のそみ申せと—きをひ給へど
子ともを—こともさにも
給つ—給／めてたく—世にいみじく
ひま—ひよ／させ給ぬ—給ぬ
をは—は／とも—（ナシ）
前の—前

ともあへかめれとことの外の事にて聞しめしいれすそれもこと
はりにいま〳〵しくおほされぬへき事なり前東宮は御年廿四に
」（二十三オ）
な□（ら）せ給にけり今の東宮（後朱雀院）は九にそおはしましける帝も東宮も
御行末はるかにおはします御有さまにつけてもいとめてたし
かくて高松殿（小一条院女御）の姫君の御事あるへしとそ世にはいふめるさて
その比殿のうへ（倫子）八幡にまうてさせ給へりけれは中宮（妍子）より聞えさせ給
　色々のもみちに心うつるとも都の外になかゐす
な君御かへし有けんし（ママ）これはおちたるなるへしかくて十月
斗に雅通の中将日比わつらひてうせ給ぬとの〻しる殿の
うへ哀に聞しめす故（雅信公北方）うへのいみしうおほしたりし物をと
思しめすなりけりいまは小少将（兼経）をこそは取わき思ふへかめれとそ
の給はせける世中のはかなきさまもあはれにのみなん皇后宮（威子）
には前斎宮（当子）いとおかしけなる尼にてをこなはせ給へは御持仏
なとさま〳〵にて奉らせ給中将の乳母は東の三位中将（道雅）の
」（二十三ウ）
御もとにと聞しめしゝかといまはそこにもなかなれは哀れに
いかて〳〵と斎宮は人しれすおほされけり皇后宮には我

御有さま―（ナシ）

外に―ほかに

し（ママ）―かし／これは―これに

斗に―ばかりにきこしめせば／雅通―雅道

取わき―とりかさね

東の―かの

御―（ナシ）

おほされけり―おぼしめされけり

こそかやうに有へきに此宮の世中をいと心ほそけに思し
たるか心くるしさにえ思したゝぬ事とわりなくおほさる二
三宮もいまたやもめにて宮（城子）にさしあつまらせ給へりさるへ□（き）
わたりにの給するはつれなく又いてやなと思しめすにをの
つから月日過るなるへし御そともの色も冬に成まゝにいと
とさしかさなり色こきさまにさま〳〵おはします此御さまを絵
にかゝはやとこそ哀に見えさせ給けれ一条の（妍子）宮には心のとか
に思しめさるゝまゝに御行ひかちにてすくさせ給後夜の
鐘の音もおとろ〳〵しく聞しめされけれは御かうしをゝし
あけ給て御覧して

」（二十四オ）

（続古今）みな人のあかすのみ見るもみち葉をさそひに
さそふこからしの風とその給はせけるかくて世中に五節
やなにやとのゝしるなれと此御わたりには有しむかしを思し
出てよろつをおほしやるにさるへき殿上人まいりたる次て
にわかき人々出あひて物かたりするもおかしきに又殿の公達
なとそ今すこし物こまやかなる事ともはかたらせ給めるかもの
行幸またなかりけれは廿余日斗に有へしとのゝしれは此一条

宮の―ひめみやの
事と―ほども／二三宮も―二三のみやも
思しめすに―おぼしめすはすゝみきこえざるほど
に
おはします―おはしますを
一条の宮―一でうみや
あけ給て―あけて
御わたり―御かた
出て―いてつゝ
又―（ナシ）
今―いかて
有へしとのゝしれは―あるべけれは

殿の北のみかとの前よりそわたらせ給へかなれは宮の御前（妍子）にさふらふ人々もゆかしかりおもへと物はなやかならんも人めつゝましうおほしめされてたゝみかとのもとよりはいくらはかりかは御覧せられんなとあるもいと心もとなかるへきを日比人々いと聞にくゝ申おもへるほとに殿参らせ給ていかにそ行幸は御覧せんとすや

」（二十四ウ）

此北の御門よりこそはわたらせ給へかめれなと申させ給へはいさやさやうに人々はいふめれといかてかはとの給はすれはあやしのことやさしきを作り色めかせ給はゝこそは人のそしりもあらめ御前よりわたらせ給はんを御めをふたかせ給へき事かはなと申させ給てたゝさりけなく北のついちを崩させ給て御覧すへきよしを申をかせ給て出させ給ぬれはわかき人々悦ひ聞えさす扨御覧するにいみしうめてたし大宮（上東門院）御輿に奉りて女房車えならすしてわたらせ給ほとなとえもいはすめてたく御覧せらるよろつはてゝ後に大殿わたらせ給こそあないみしやと見えさせ給ふ

（以下二行分白紙）

」（二十五オ）

（挿絵）

」（二十五ウ）

（挿絵）

」（二十六オ）

御前に―御まへにも

とすや―とや

いかてかはと―いかでかと

色めかせ―はなやかせ

給はんを御めを―給はんことを御かほ／なと―と

御輿に―御こし

給ほとなと―給ほど

給ふ―給へ

又の日此宮より大宮に聞えさせ給ふ

（後拾遺雑五）みゆきせしかもの川波かへるさにたちやとまると待

あかしつる大宮の御かへし

（続後撰神祇）立かへりかもの川波よそにても見しやみゆきの

しるしなるらんとそさて院（小一条）の御事けふあす有へしと

のゝしるはまことにやあらん堀川の女御（顕光公女延子）此事によりて御胸

ふたかりておほしなけくへしさてしはすにそむことり奉

らせ給へき此比その御ようい心ことなり此御前（御堂殿女）をは月比

御くしけとのとそ聞えさせける御かたち有さまあへいかきり

おはします御心さまなとめてたしとそ人は申めるさるへ

き人々えりとゝのへさせ給宮々なとに参りこみてやと

思しめしつれと恥なき人々おほく参りつとひたりまつ

」（二十六ウ）

は故院（三条）にさふらひ給し橘三位の腹に山井大納言（道頼）のむすめ

といはれ給し大納言の君とてさふらひ給めり何くれの宮

かの殿はらの御むすめなと名のり給ふ人々おほかめりすへ

てえりとゝのへたるかきり廿人童しもつかへ四人つゝなり

大宮の―大宮

とそ―（ナシ）

此事によりて―このことをきゝて

此比―（ナシ）

なと…申める―など人はめでたしとそ申める

やと―みやと

橘三位の腹に―三位のはらから

大納言の君―大なごんきみ

御むすめ―にようご／名のり…おほかめり―さる

べき人々おほかり

御しつらひより初めあたらしうみかきたてさせ給へれは
か、やきてそ見ゆるその夜になりて院（小一条）わたらせ給御前
にさへう心よせある殿上人をえらせ給へり又なかりつる御
なからひ有さまのほと世にあらまほしき事のためしに
成ぬへし殿上人のけしきいへはをろかにさかりならん
桜なとの心ちしたり御車のしりに大蔵（朝経）卿つかうまつ
り給へりさておはしましたれは此御はらからの左衛門督（頼宗公）
二位中将（能信）なとしそくさし入奉り給殿はおはしますなれ
」（二十七オ）
と忍ひてうちのかたにそおはしますへき殿の御前の御
ともはそはのかたに忍ひやかにうちむれてあるに院の
御供の人々忍ひさせ給へといとおほくそさふらふ御随
身とものけしきえもいはすやさしう思へり入せ給へれ
はおほとなふらあるかなきかにほのめきたれと匂ひ
ありさま夜めにもしるし東宮にておはしましゝなり
まいらせ給はましかは例のさほうにそあらましこれは
いまめかしうけちかき物から又いとやん事なし女君
十八九はかりにやおはしますらんとそおほえたる御けはひ

御前―御せんに
世に―（ナシ）
督―かう
御前の御ともは―御せんどもは／そはのかたに忍ひやかに―（ナシ）
おはしましゝなり―おはしましゝに

ありさまいとかひありておほさるへしそれにつけても堀
川の女御思ひ出られ給も心くるし
○日ころ有て院（小一条）堀川におはしまして御覧すれはわさと
」（二十七ウ）
みちも見えぬまてあれたりあはれと御覧していらせ給へ
れは女御殿は御帳の前に御硯の箱を枕にてふさせ給
へる御前に女房二三人はかりさふらひつれとおはしまし
つれはみな入にけりめやすき人々さふらひしかともこの比
みな出はてゝえさらぬ人々そさふらひける見奉らせ給へ
は白き御そともいつゝむつはかり奉りて御こしのほとに
御ふすまを引かけておほとのこもりたる御くしはいと
うるはしくてすそほそくてたけに一尺はかりあまらせ
給へるほとなり御かたちきよけにてたゝいまは三十
はかりにおはしますらんかしされといみしうわかうきよけ
に見えさせ給ふなをふりかたき御かたちなりかしと
御らんしてやゝとおとろかし奉らせ給へはなに心もなく
」（二十八オ）
見あけ給へるに院のおはしませはあさましくて御かほ

堀川の女御―ほりかはにやうご

しかとも―しかど

おほとのこもりたる―おはします

御―（ナシ）

ひきいれ給へは御かたはらにそひふさせ給てよろつに
なきみわらひみなくさめ聞えさせ給へとそれにつけて
もむねふたかりて御泪のみなかれ出れは院はよろつに
聞えさせ給へとかひなしいつら一の宮はと聞え給へはおはし
ましてうち恥らひておはしませは此宮もみなはちける
物をとて御涙ををしのこはせ給もいみしう哀なり
女御の御その袖のかたにたゝうかみのやうなるものゝ有
をとりて御覧すれは思しける事ともをそ書給へる
過にける年月なにを思ひけんいましも物のなけかしきかな
打とけて誰もまたねぬ夢のよに人のつらさをみるそ悲しき
千とせへん程をはしらすこぬ人を待は猶こそ久しかりけれ
」（二十八ウ）
恋しさもつらさもともにしらせつる人をはうしといかゝ思はぬ
とくとたに見えすも有かな冬のよのかたしく袖にむすふ氷の
なとかゝせ給へるいみしうあはれなりかく物を思はせ奉る事
なとか時々はこゝにもとまらさらんされと人のいみしうもて
なしおほいたることのわつらはしけれはたゝいまはいかてかは
いましはしもありてこそはなとおほすもいとあはれなり

給て―て

御その袖のかたに―御そばのかたに

かな―かな。また

いかゝ―（ナシ）

むすふ氷のと書給へるかたはらにかゝせ給
　あふ事のとゝこほりつゝほとふれはとくれと解る
けしきたになしよろつにたゝわか御命しらぬ事
をのみえもいはす聞えさせ給て出させ給に宮たちの
たちさはき見をくり奉らせ給に又御涙のこほるれは
ついゐさせ給てよろつになくさめさせ給て御めのと
」（二十九オ）

ともめしていたかせ奉らせ給て殿の御かたにおはしまさ
せ給てそすこし心やすくて出させ給みちの空もなく
いみしうおほさるへし御供の人々もとまらせ給はゝいかに
日なかゝらんと思ひけるに出させ給へはいとうれしくおもひ
たるもいと心うし高松殿におはしましたれはたとしへ
なき事ともおほかりこたひのたえまいとこよなし女御
いまはたゝこのなけきはわか身のなからんのみそたゆへきと
御心ひとつをとなしかうなしいつまてくさのとのみおほし
みたる粟田殿（道兼公）の北方（遠重女）は年比此殿（顕光公）の北方にておはすれは
此比はうへなとの聞え給事も殿は聞入させ給はすいみし
とのみ物をおほしたるかいとあはれになんつこもり

よろつに―（ナシ）／させ給て―たてまつらせ給

給てそ―給て

こたひの―こたみの

なけきは―なげきには／のみそ―にのみぞ

御心―心

いと―（ナシ）

に成ぬれは高松殿にはやかてそれにそ院の御めのと
たちにさへき事ともせさせ給装束ひきくたりをり
物のうちきともそへ又たゝのきぬなとそへさせ給へるに
又院の御そともおろしそへさせ給へるにまたある物も有
へし一条宮には御荷前のことするにつけても夢とのみ
おほしめさる夜のほとにかはりぬる空のけしきもいと
はれ〳〵しく心のとかにてうら〳〵とおかしけなりよろ
つ物のはへなき年なれは例まいり給上達部臨時客おなし
事なりされと女房なとの出入もなくひきいりたる御あり
さまも口おしうと高松殿には女房の事もあらため心ち
よけなれと院の御その色ことなれは物のはへなき事とも
なりよろつよりも御門（後一条院）の御年十一にならせ給へは正月
五日御元服の事有そのほとの有さまおもひやるへし
」（三十オ）
此廿余日のほとは摂政（頼通公）殿の大饗有へけれはその御屏風ともせさ
せ給へるにさるへき人々にみな歌くはり給するに大殿我も読ん

」（二十九ウ）

うちきともそへ―きぬ
おろしそへさせ給へるに―そへさせ給ふに
御荷前のこと―御のさきのこと
うら〳〵とおかしけなり―うら、ゆかしげなり
出入―いてゐ
口おしう―くちおしうぞ／心ちよけなれと―こゝ
ちよなれと
その御屏風とも―御屏風
給へるに―給

とおほせられて世のいそきに御いとまもおはしまさねととも
すれは端ちかく打詠てうめかせ給ほとさま〳〵にめてたく人
の御さいはひ御心さまもつねの事なからかはかりいそかしき御心に
かゝる方をさへ忘れさせ給はぬ御心のほとも聞えさせん方なくおはし
ますすへて和歌八十首そ出きたりつれと入たるかきりを

たにつくしかゝす大和守すけたゝのあそん卯杖を
　ときは山生つらなれる玉椿君かさかゆく杖にとそ
きる大饗したる所殿の御前
　君かりとやりつる使きにけらし野への雉子はとりや
しつらん春日の使たつ所和泉
」（三十ウ）

　春日野に年もへぬへし神のますみかさの山にき
たりとおもへは水ある家にまらうとのきたる祭主輔親
　此宿に我をとめなん池水のふかき心にすみわたる
へく五月節すけたゝ
　くらふへき駒もあやめの草もみなみつのみまき
にひけるなりけり九月九日殿の御前

端ちかく―はしちかに／打詠て―うちながめて
方を―ことを／忘れさせ―わすれすてさせ
和歌―うた／八十首そ―八十ぞ／かきりをたに―
かぎりに
生つらなる―おいつくなれと
院の御前―（ナシ）
水ある家に―やまざとにみづあるいゑに／祭主―
さいす

から国も菊をそ人は忍ひけるまかきにこめて千世を
匂へは四条大納言（公任）別に二首奉らせ給へり桜の花みる女車有所
春の花秋のもみちも色々に桜のみこそ一時はみれ
又もみちある山里に男きたり
山里（後拾遺秋下）の紅葉見にとや思ふらん散はてゝこそとふへかりけれ
いとおほかれとつくしかゝす
（挿絵）」（三十一オ）
（挿絵）」（三十一ウ）
（挿絵）」（三十二オ）
（挿絵）」（三十二ウ）
（挿絵）」（三十三オ）
大饗の日寛仁二年正月廿三日なりありさまいふもをろ
かにめてたし尊者には閑院右大臣（公季公）殿そおはしましける
うへ（頼通公室）の御ありさまなといとあらまほしくめてたきとの也
式部卿宮（敦康）の姫宮（嬉子）生れ給しよりやかてとりはなちてやし
なひ奉らせ給へれはいとうつくしけにておはします
堀河院にはかの上陽人の春ゆき秋くれとも年をしらす

から国も―かくのみも
匂へは―おもへば／別に―べちに／有所―あるところ
一時は―ひとゝきも
つくし―（ナシ）
殿―（ナシ）
堀河院―ほりかはの院

といふやうに明くるゝもしらせ給はすあさましうおほし
なけきてねさめつゝやすくもおほとのこもらねは
残りの灯のかへにそむけるかけも心ほそくおほさるゝに
御前の梅の心ようひらけにけるもこれをいまゝてしら
さりけるわか(延子)身世にふるなとなかめさせ給ける
いつこより春きたりけむ見し人の絶にし宿に
」(三十三ウ)
梅そにほへる鶯の物わかき初□(声)もうれいあれは聞を

いとふなと有けんもまことなりけりと思ししらるよろつ
かはらぬ御ありさまなるに宮達の御そはかりをそあさや
けさせ給て院の御をきてのあれは宮達に御節供ま
いれりよろつあはれなる世を殿(顕光)は小袴きてあしたはかせ
給ひて杖をつきてみちのまゝにありかせ給御前の小木
とものおひさきつくろはせ給へは一二の宮(教貞)(教通)は人にいたかれさせ
給つゝありかせ給ほともあはれにすこけなり高松殿の
ありさまを院(小一条)いかに御覧しくらふらんと御めうつりのほと

やすくも—にやあらん
灯—ともしび／かけも—なげきも
御前—おまへ
なかめさせ給ける—ながめられ給て

物わかき—うらわかき／初□(声)もうれいあれは—初
こゑもうれはしければ

御をきての—御をきて

御前の—おまへの
一二の宮は—一のみやは
給つゝありかせ給ほとも—給。つゞきあるかせ給
ほどに

もおもひやられて恥しうすゝろはしうおほさるゝ御心の
うちもことはりなから又あなかちなり枇杷殿(妍子)の宮には
故院(三条)の御笛を此宮の権大夫とあるは源中納言(経房)にこれ
」（三十四オ）
かたかひたる所つくろひてとてあつけさせ給へりけるを
物の中より見いてゝかう〳〵侍しをわすれていままて
まいらせ侍らさりける事とて御前(妍子)に参らせ給てやかてす
こしふきならさせ給を聞て命婦の乳母
笛竹(玉葉雑四)の此世をなかくわかれにし君かかたみの
声そ恋しき

あさみとり

一條宮(妍子)には御前の桜のをそき事をおまへよりはしめ□(奉)
りて心もとなき事におほしの給はすれは土御門の御
くしけ(正光女)との
咲さかすおほつかなしや桜花ほかのみるらん人に
とははや弁の乳母(順時女)
」（三十四ウ）
大かたの桜もしらすこれをたゝまつよりほかのことし

うちも―うち／又―（ナシ）
此宮の―このみや
給て―給とて
御前―御まへ

なけれは弁のめのとそのころさとにまかつるに三条院の前をわたれは木たかゝりし松の梢もすこし色かはりて心ちよけなるについちにはなにとなき物しけう

はひかゝりたれはいみしうあはれにむかし思ひ出られて小侍従の君のさとにあるにいひやる車とゝめたるほともすき〳〵しうおかしきに

千載雑中
むかしみし松の梢はそれなからむくらのかとをさしてけるかな返し小侍従の君

君なくてあれ増りつゝ葎のみますへき門と思ひかけきや三月廿日のほとに一条宮に桜をまいらせて

道命阿闍梨

いかならんきかはやしての山桜おもひこそやれ

君かゆかりにとあれは中将のめのと返し

君ゆへにかなしきけさの匂ひかないかなる春か

花をおりけむ

」（三十五オ）

○一条宮には四月つこもりに御服ぬかせ給てしかはよろ

心ちよけなるに―こゝちよげなり／ついち―ついひぢ

すき〳〵しう―すぎて

むくらの―むくらは

桜を―桜

道明―だうめい

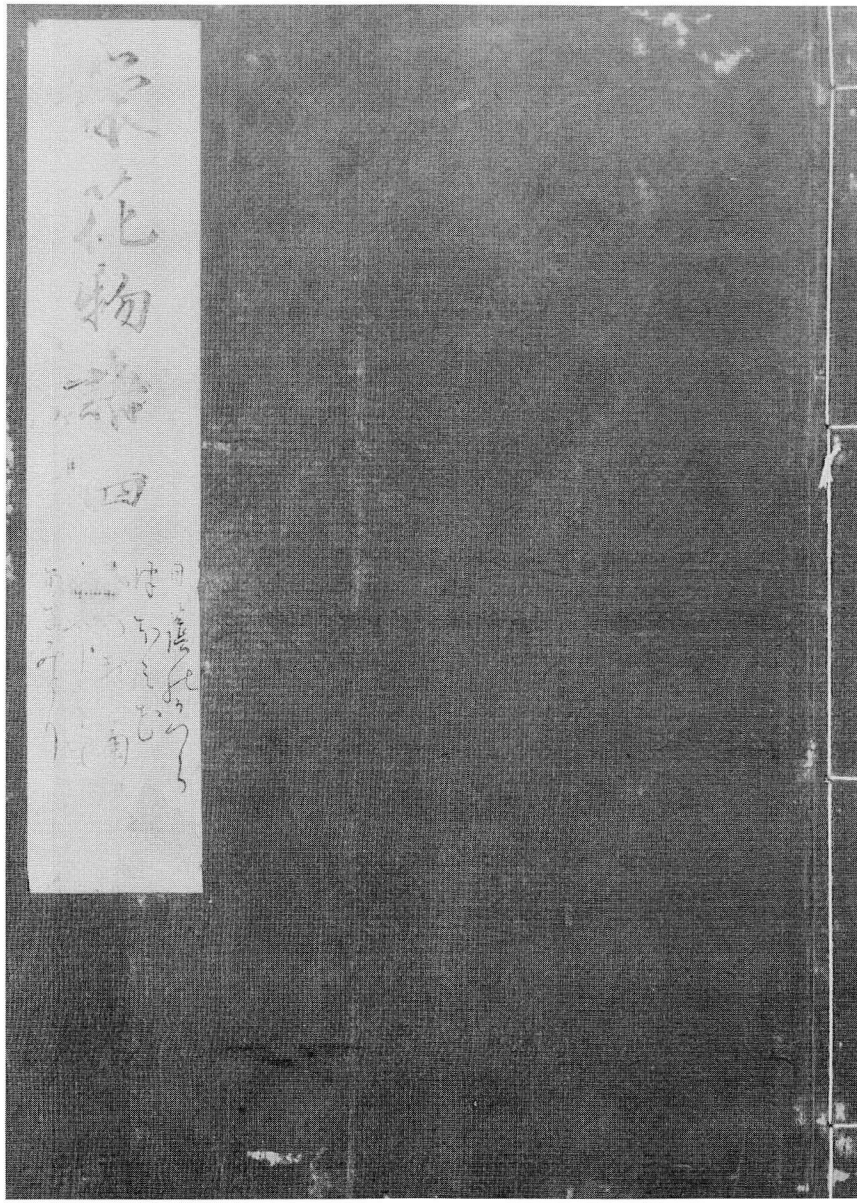
ゆへに―ゆへは

つあらたまりはなやかなりされとなをあさやかなる色
はまた奉らす五月五日院（小一条）より姫宮（陽明門院）の御かたにとて
くす玉奉らせ給へり
　このころをおもひ出れはあやめ草なかるゝおなし
ねにやとも見よ御返し
　いにしへをかくる袂を見るからにいとゝあやめのねこそしけ
けれ九日は御正（三条院）日にて御覧するもいとあはれなり

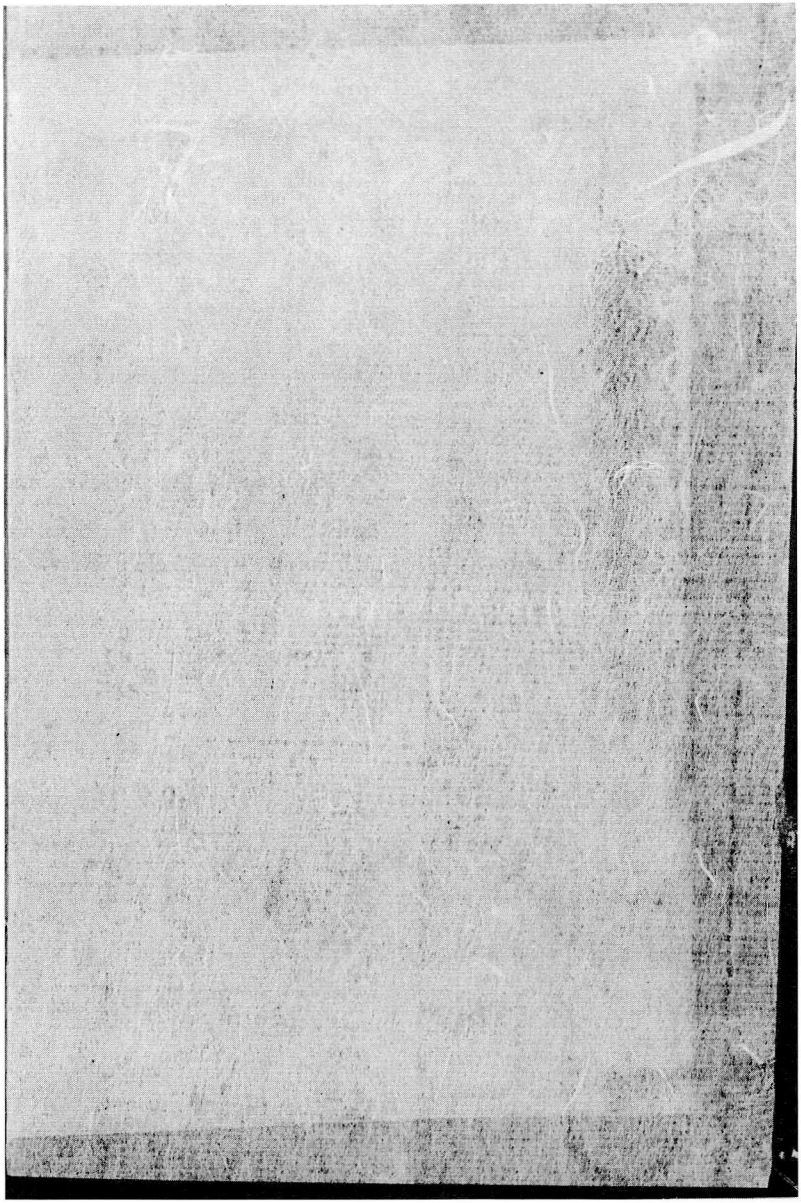
」（三十五ウ）
」（後見返し）
」（裏表紙）

（白紙）

あさやかなる―はなやかなる
また―（ナシ）／姫宮の―ひめぎみの
袂を見るからに―たもとはみるごとに



（表紙）



（前見返）

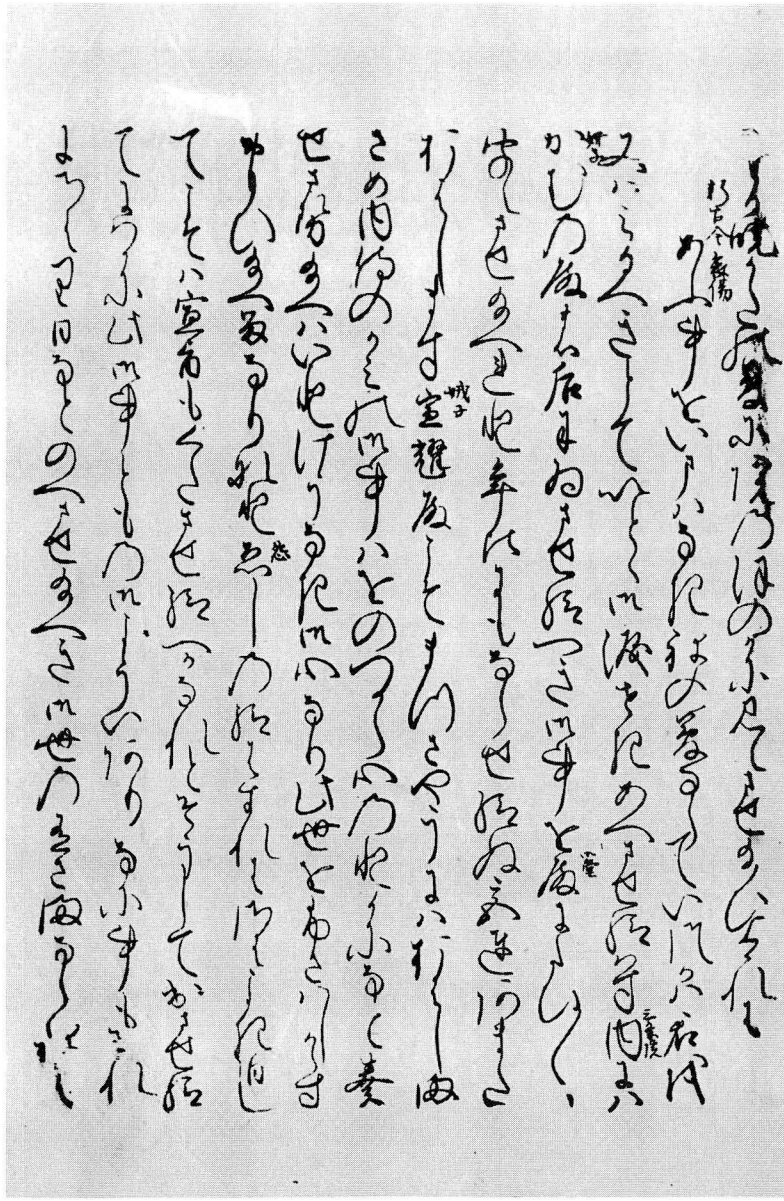
栄花物語四

日蔭のかつら

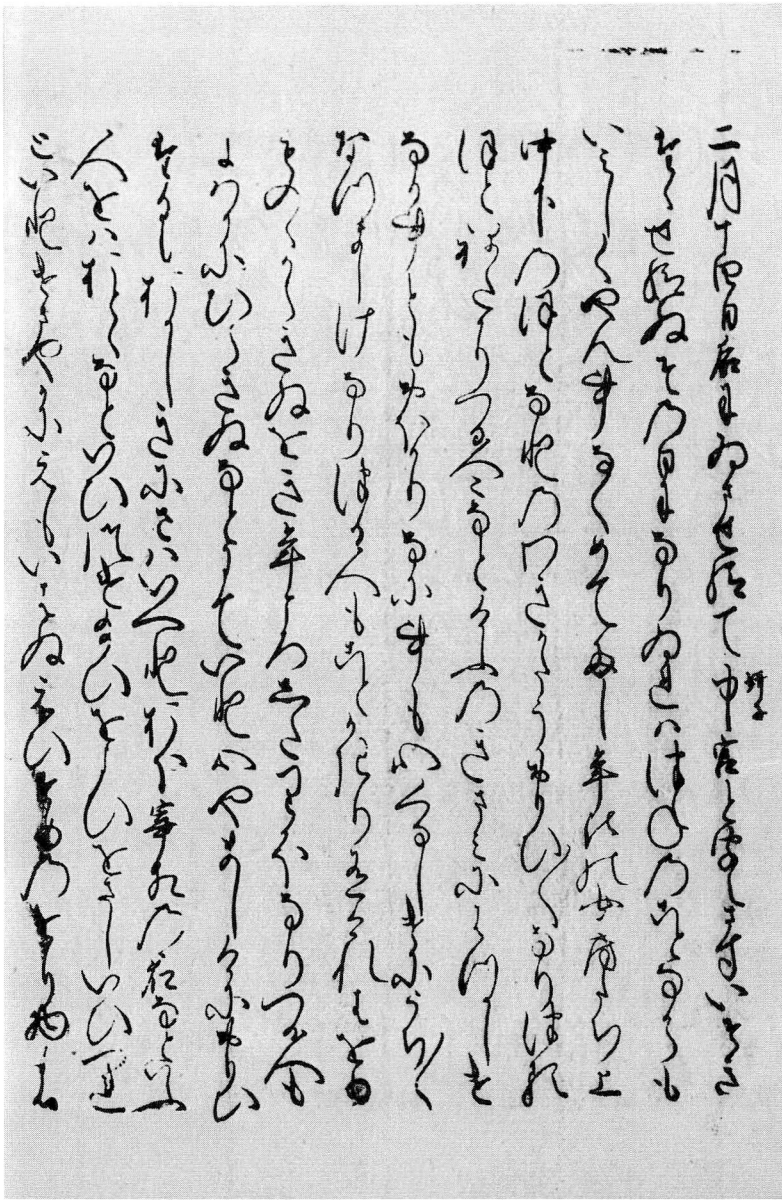
戸川藏書

（一オ）

（二ウ）



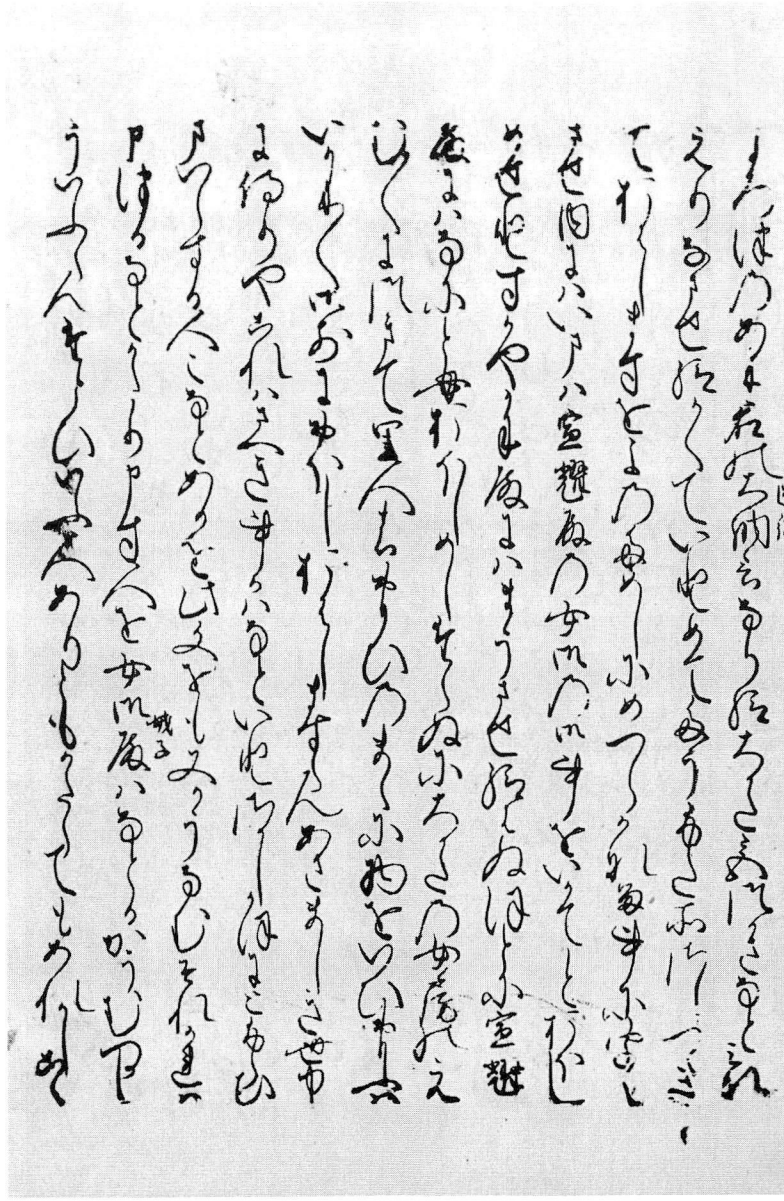
（二オ）



（三ウ）

（三オ）

（三ウ）

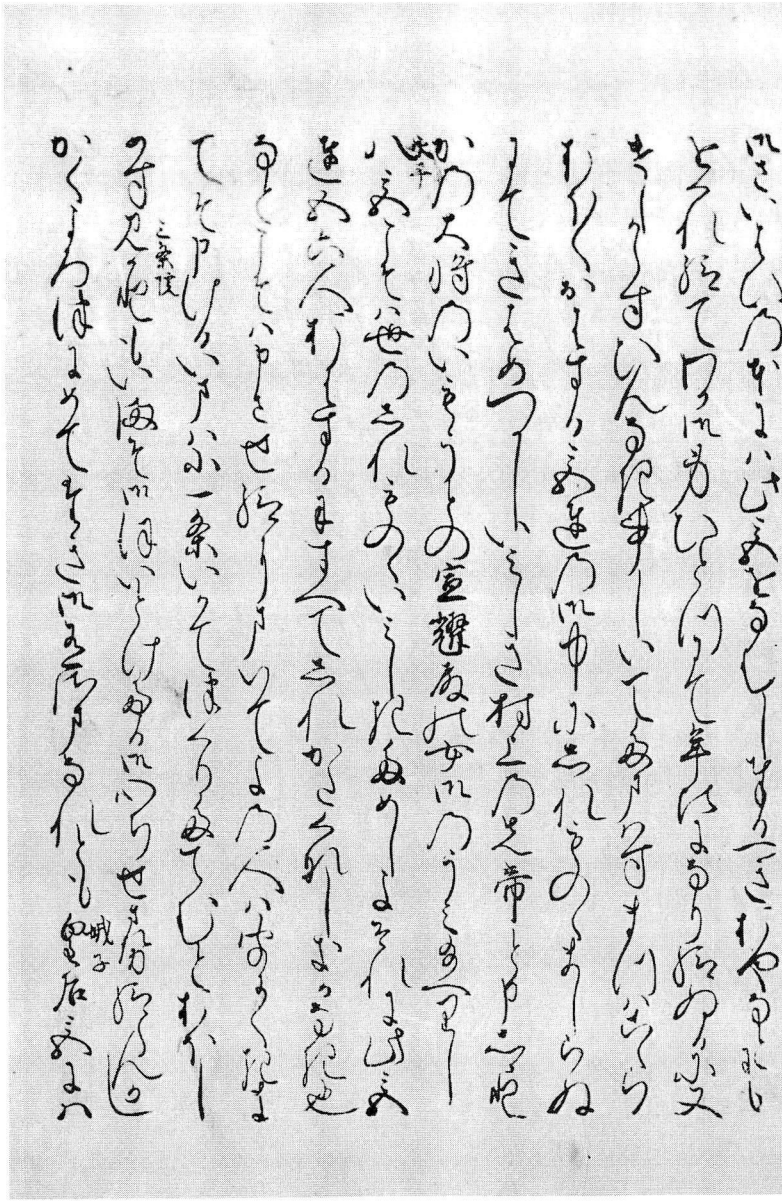


（四オ）

（四ウ）

（五オ）

（五ウ）



（六オ）

（六ウ）

（七オ）

（七ウ）

（八オ）

（八ウ）

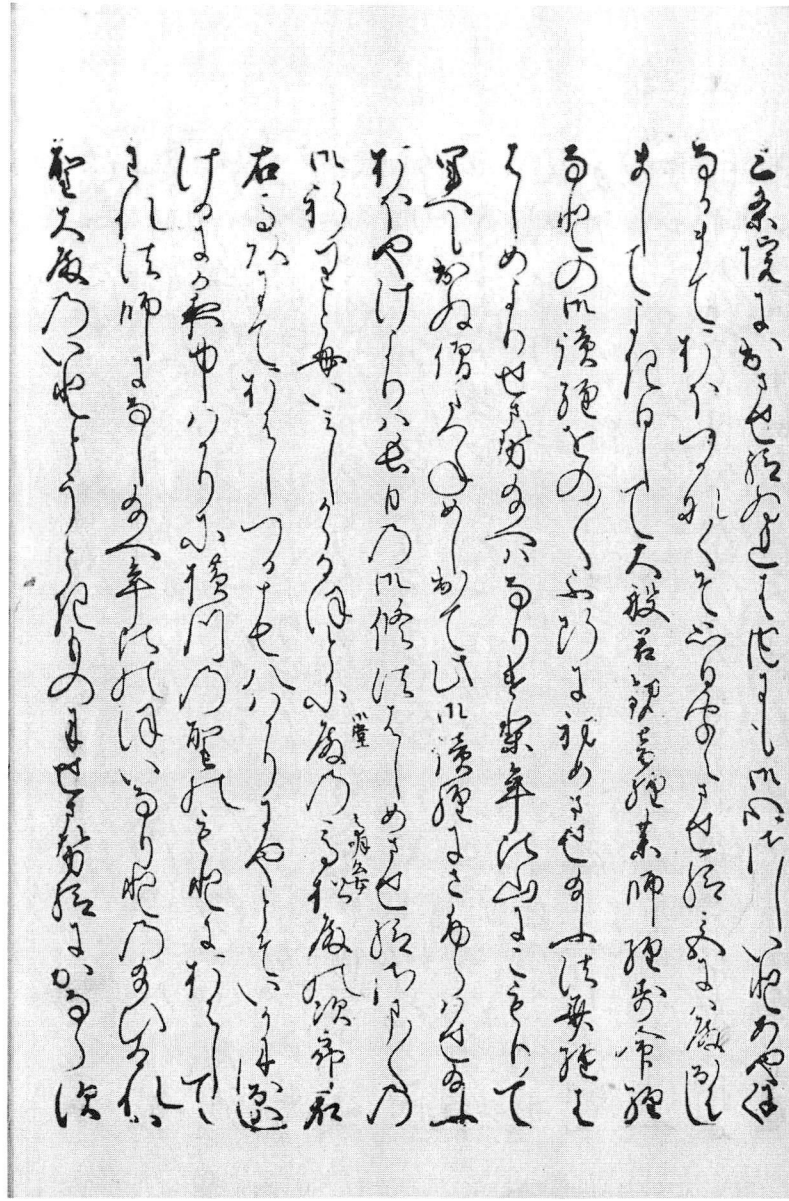
（九オ）

（九ウ）

（十オ）

四佛名も例の佛名經なと御ものかもれてはふ
あるとて宮地とりふさしてるしなしものくしなりてゆ
くしのまとはいとりまハえ日の狐ねいりてゆさ
まめてゆ一夜とりてこよハこんとりせいてこ地ふき
ゆうこりてさけいもまてこりていとりて猶
中しもいうこそれもけりくいこハまてし
してそれめて四月ていあの日のおもせのこさてのの
日女房のもり私ものやふせ殿ていたのの
めまてしさしたまちりてもりいもの一はいれ行
清せさ殿ていめてゆ一地ふまてかうやハ人てさあ一
夜ふしのてさしくしもり初しもはこうまゆ
めてこ一条殿ハ方あさうしまえ行もまて

（十ウ）

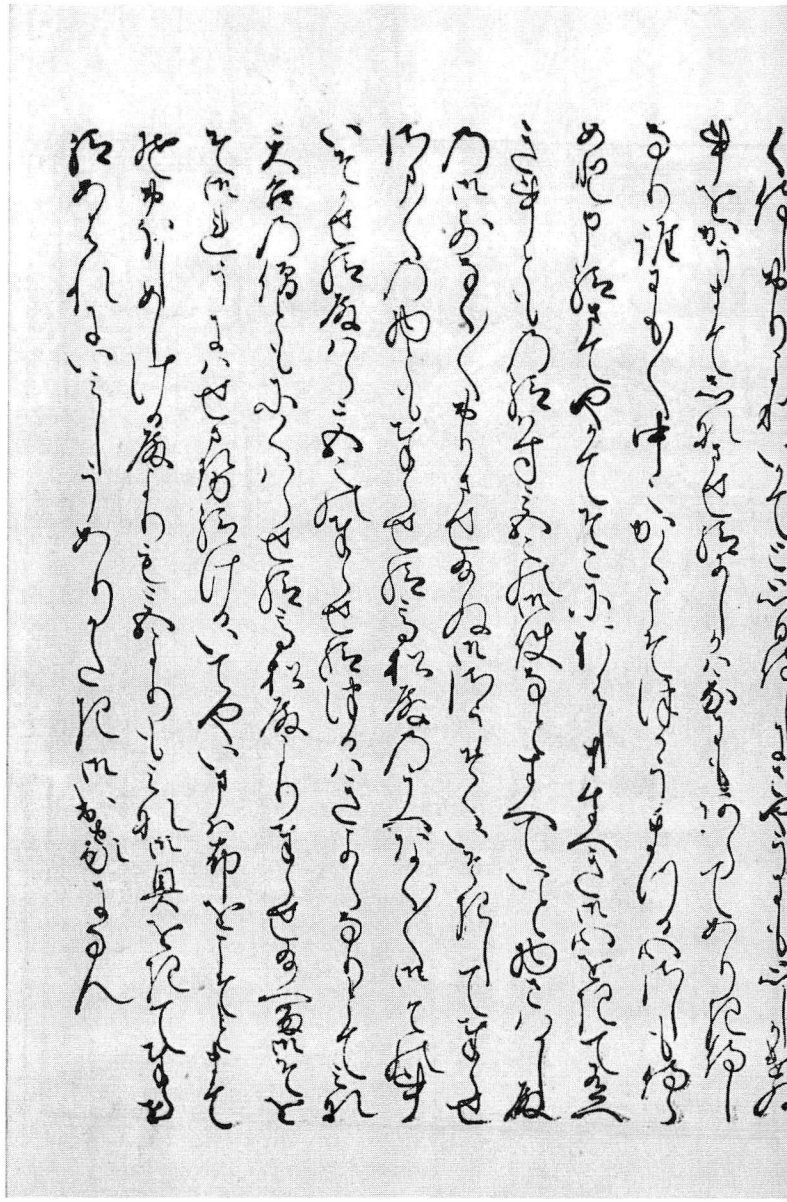


（十一オ）

（十一ウ）

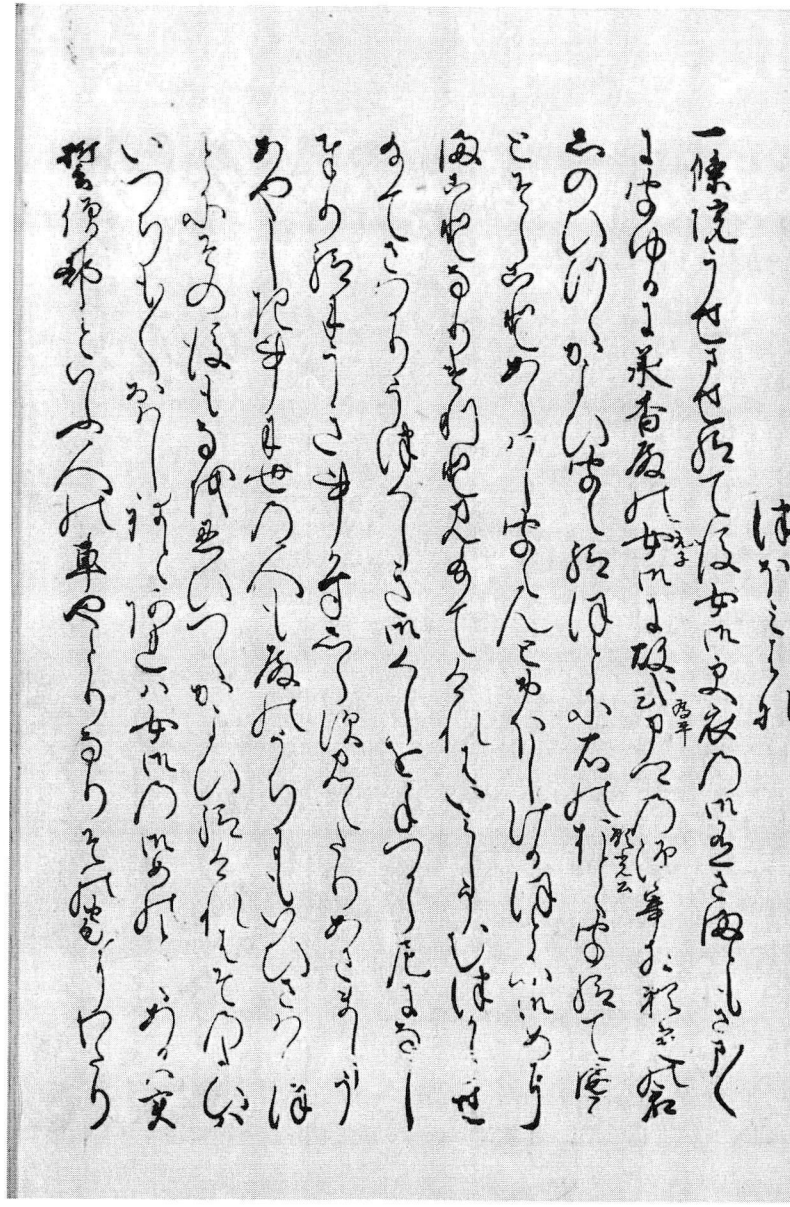
（十二オ）

（十二ウ）



（十三オ）

（十三ウ）



（十四オ）

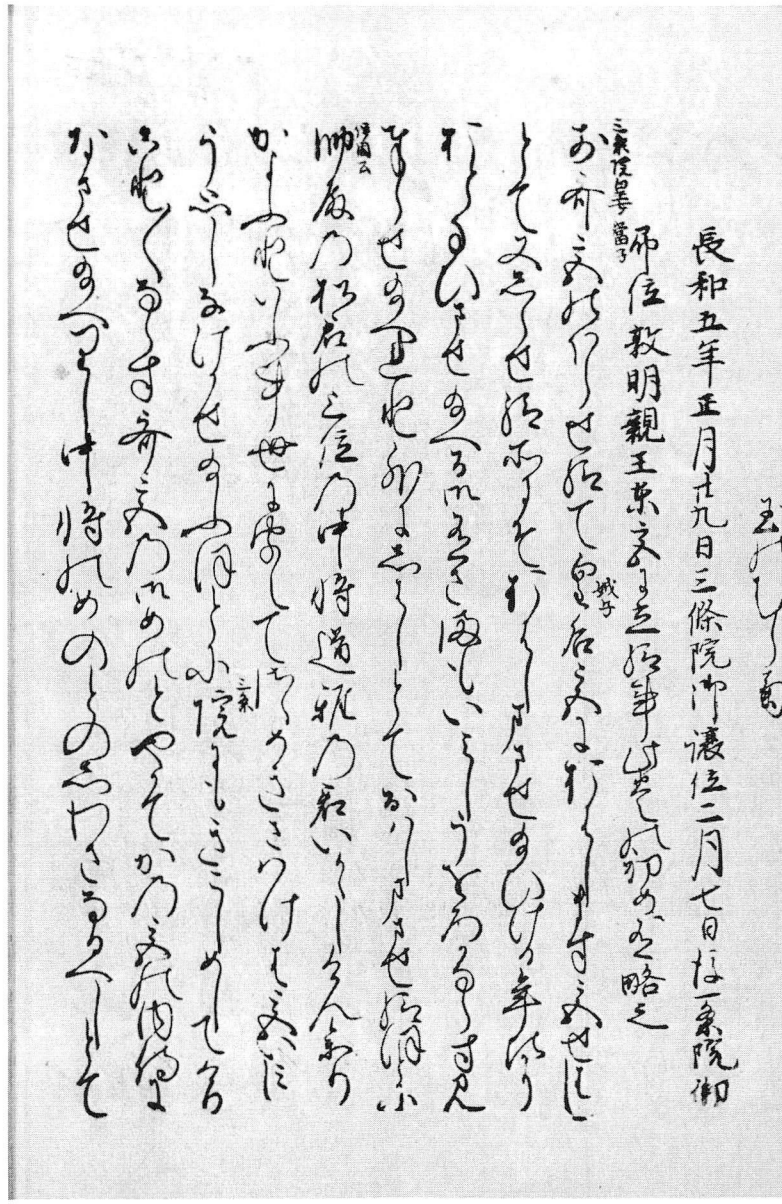
（十四ウ）

（十五オ）

（十五ウ）

（十六オ）

（十六ウ）



（十七オ）

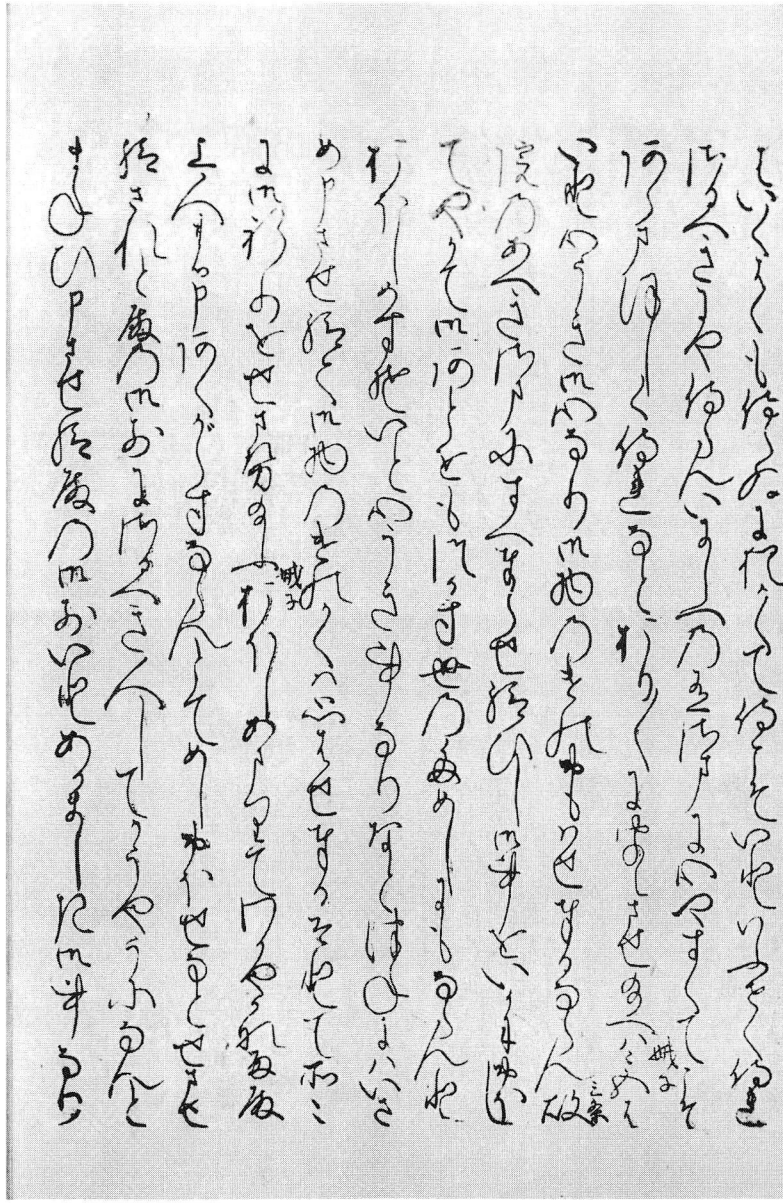
（十七ウ）

（十八オ）

（十八ウ）

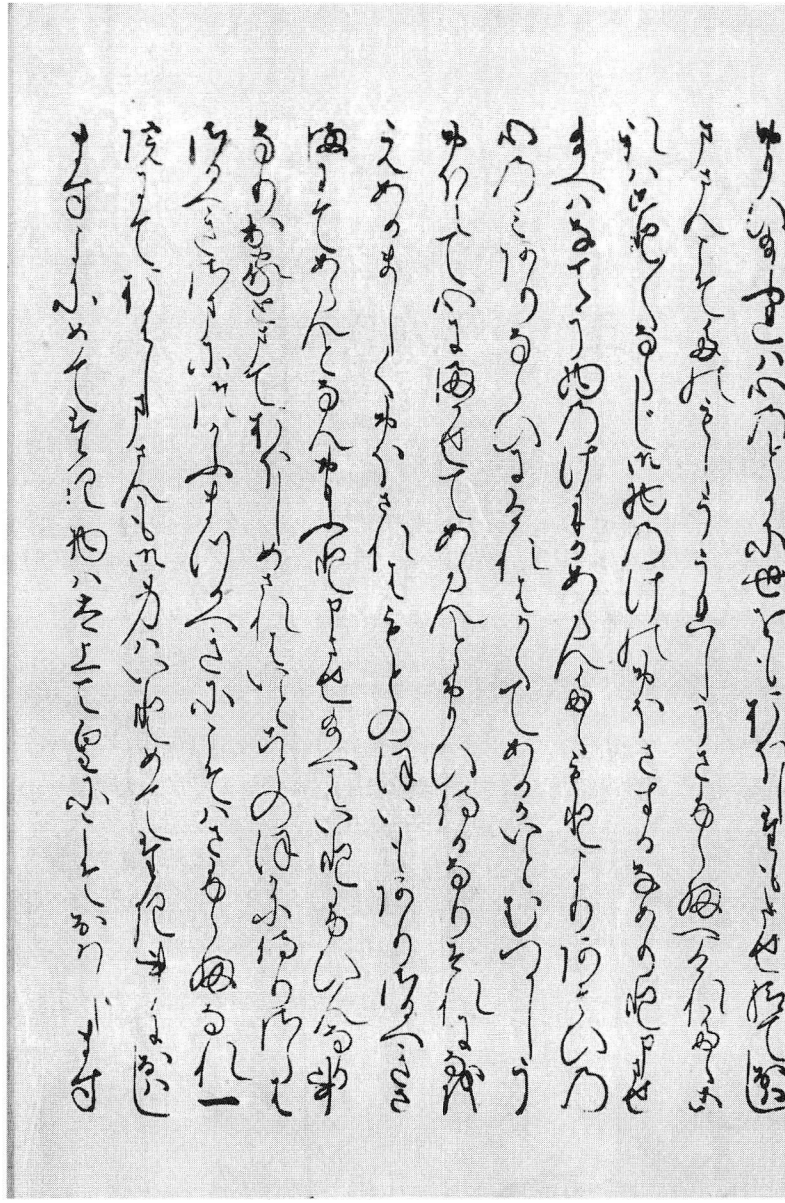
（十九オ）

（十九ウ）



（三十オ）

（三十ウ）

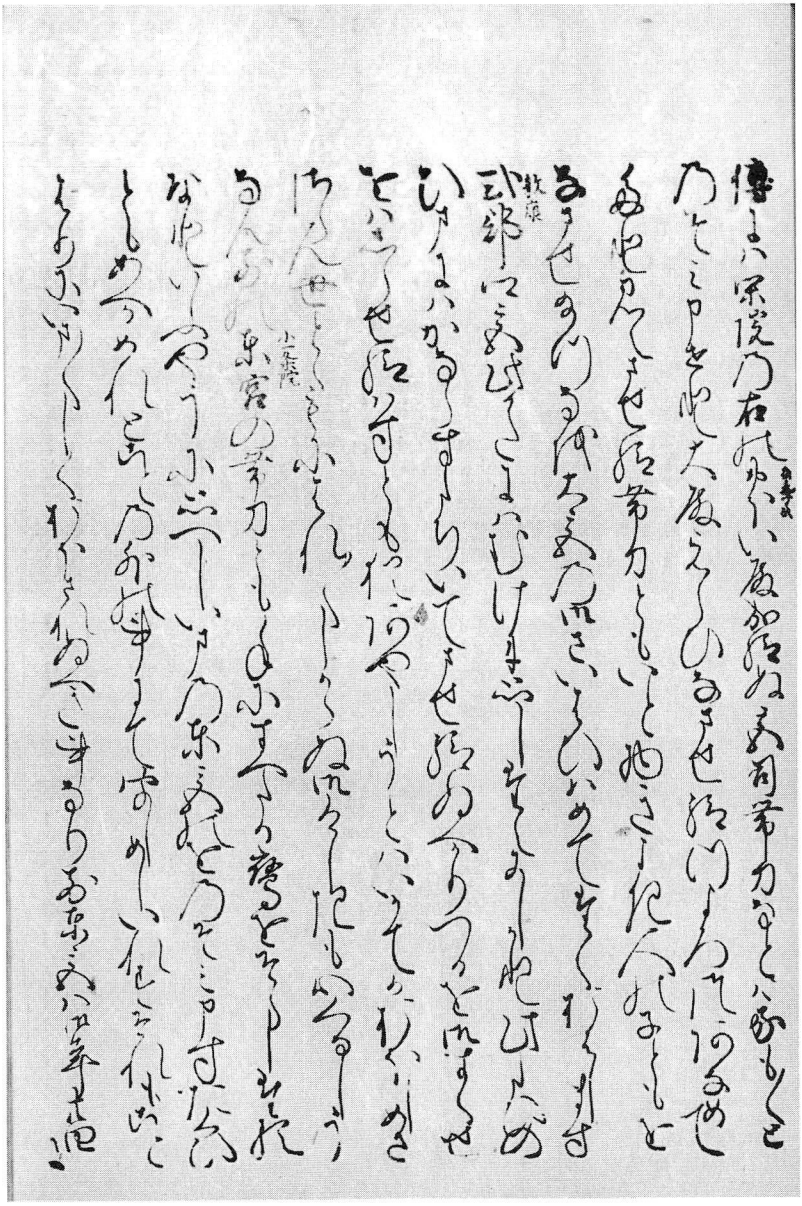


（二十一オ）

（三十一ウ）

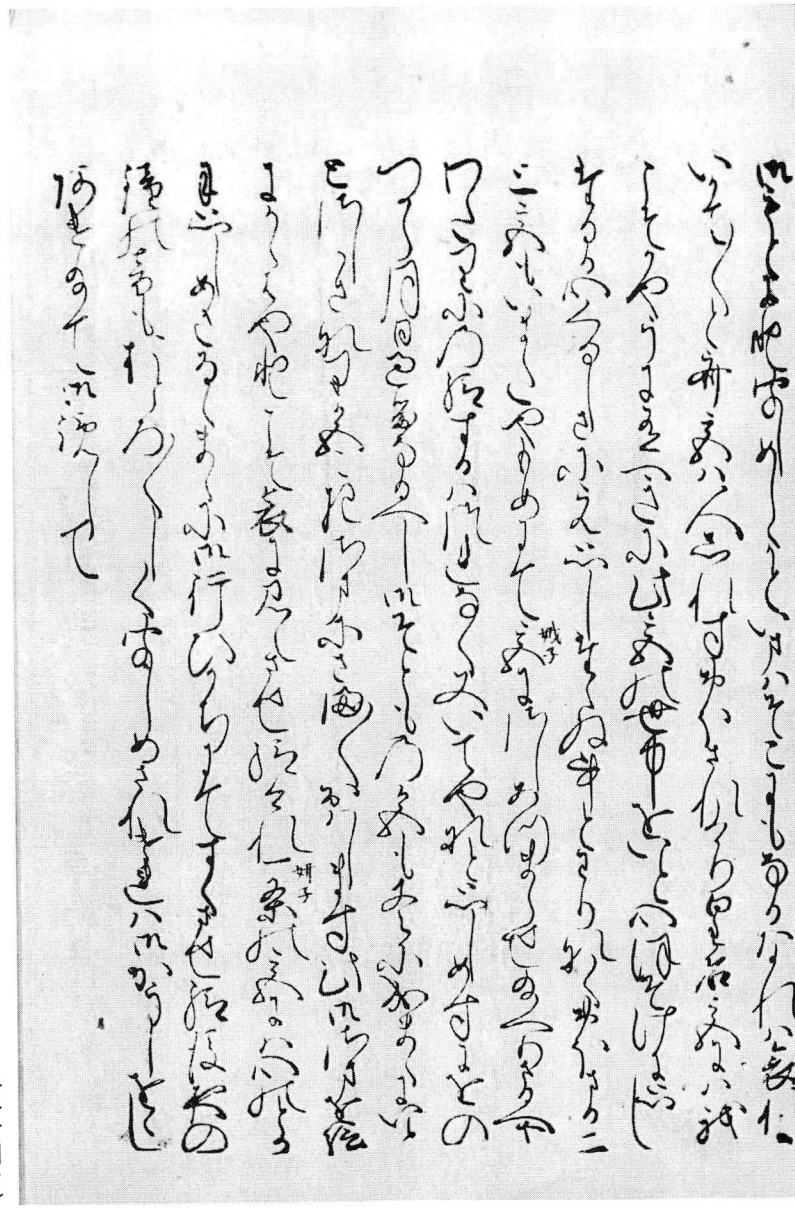
（二十二オ）

（二十二ウ）



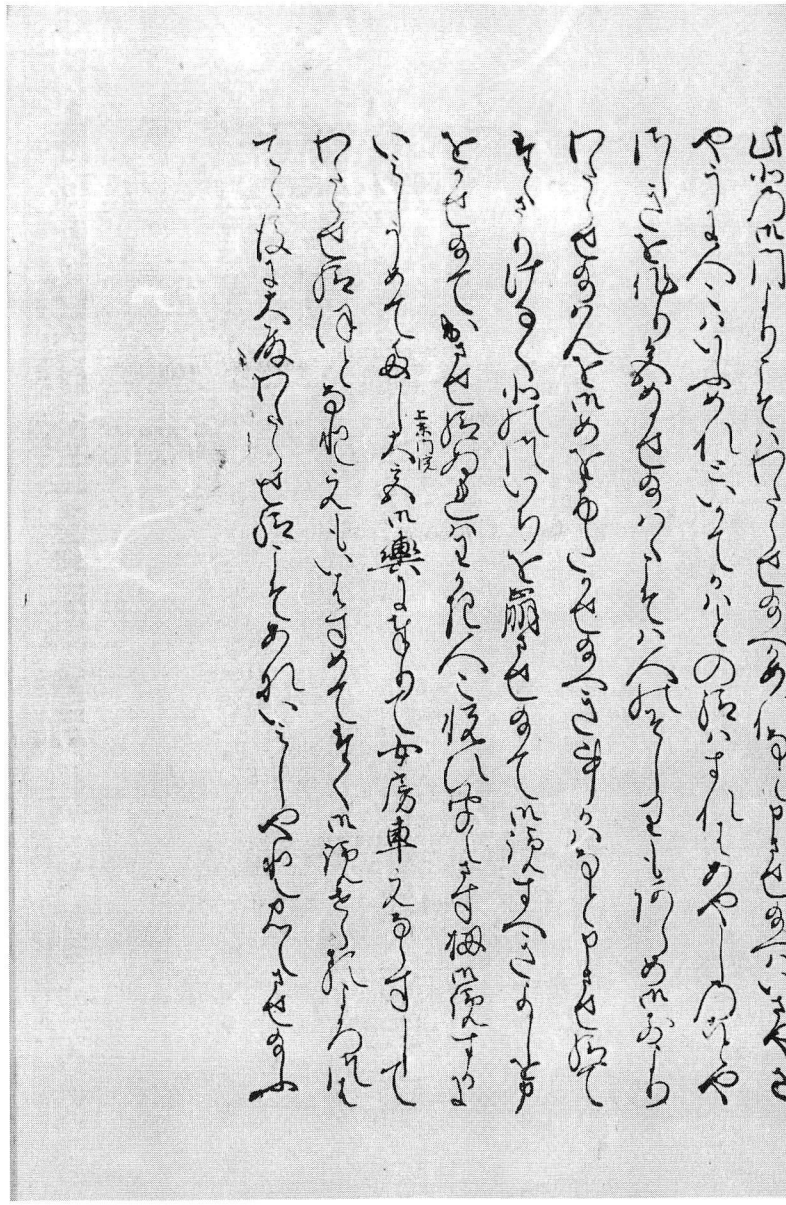
（二十三オ）

（二十三ウ）

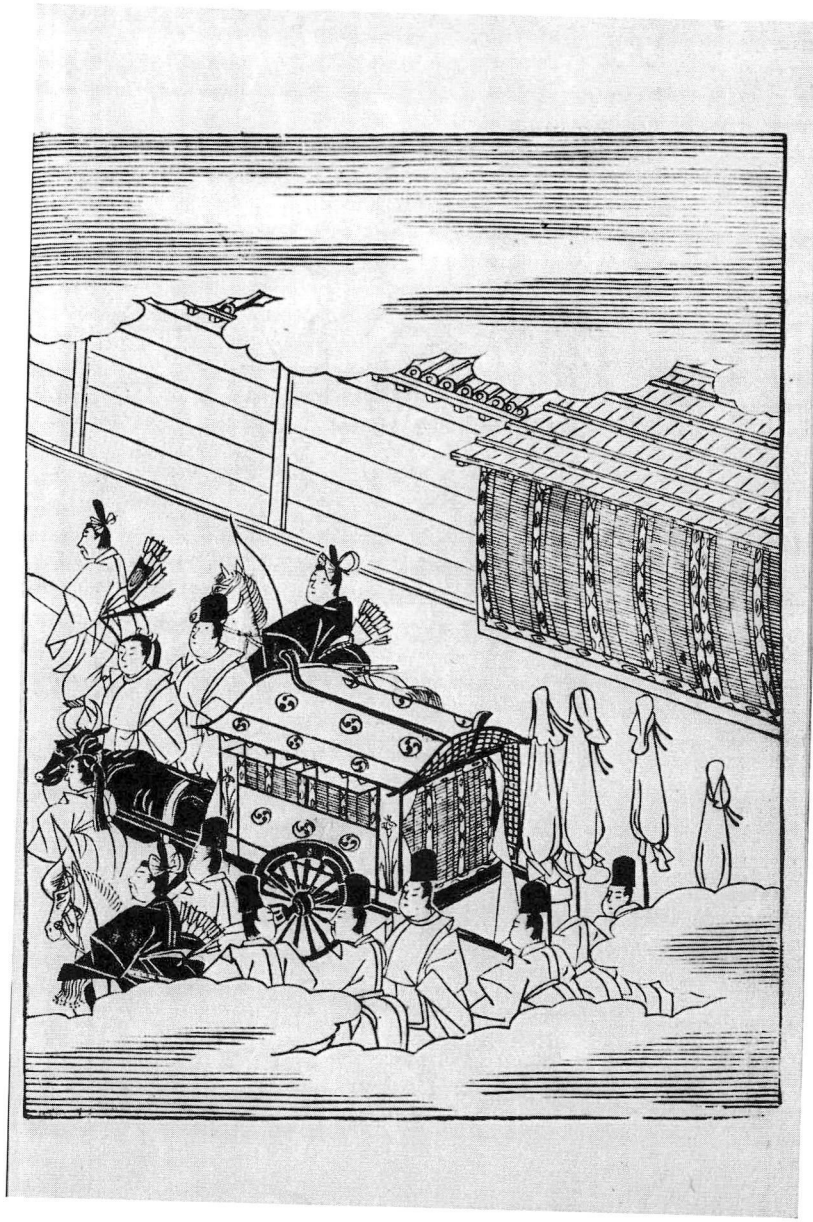


（二十四オ）

（二十四ウ）



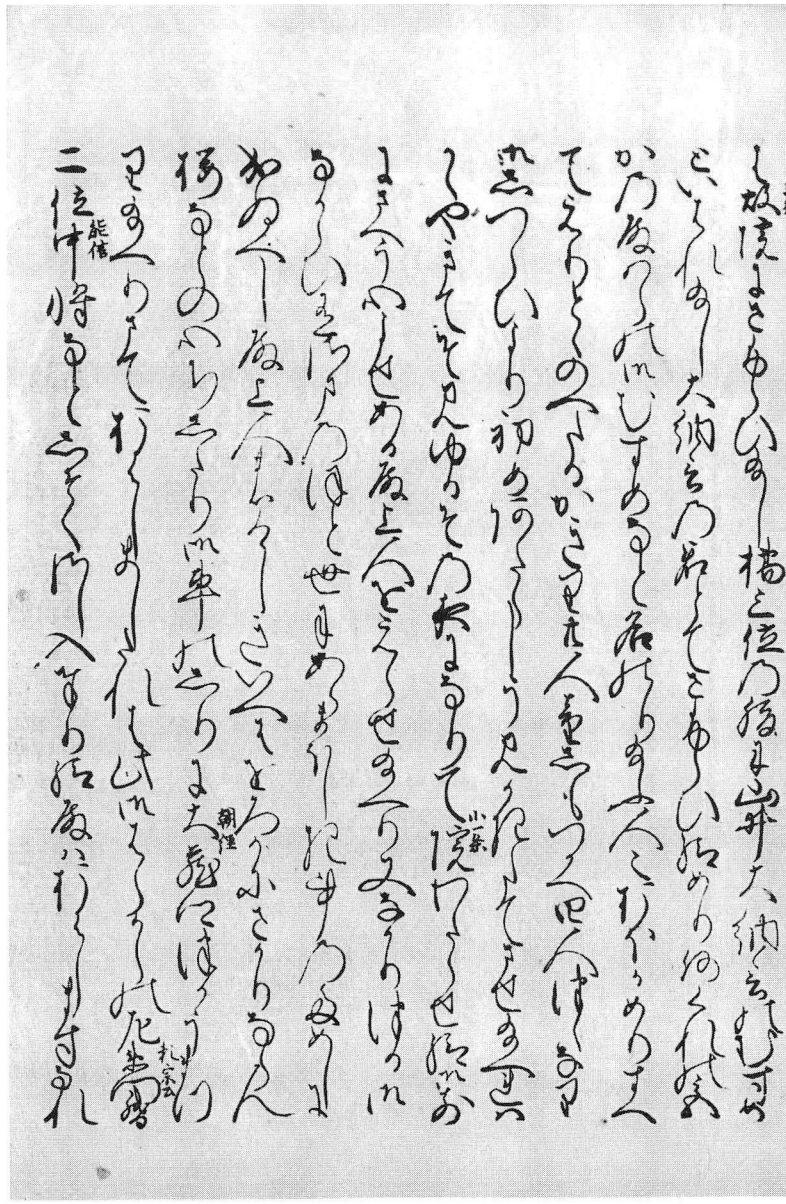
（二十五オ）



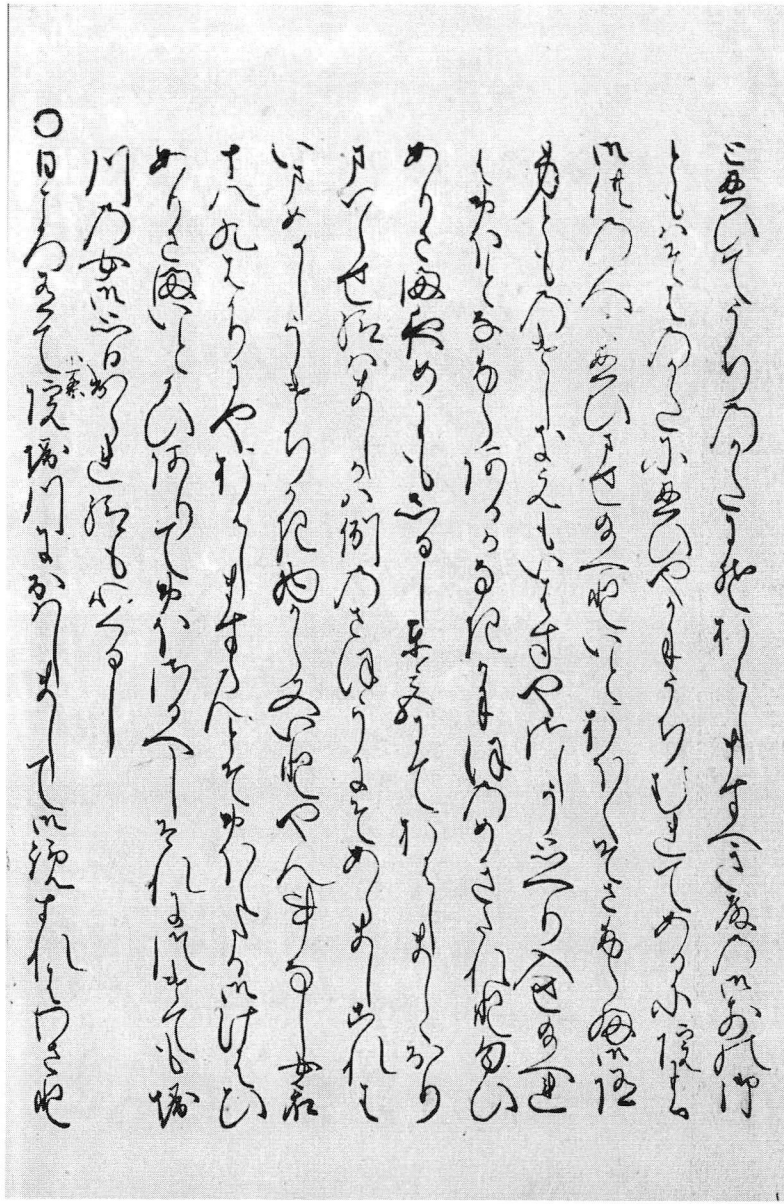
（二十五ウ）

（二十六オ）

（二十六ウ）

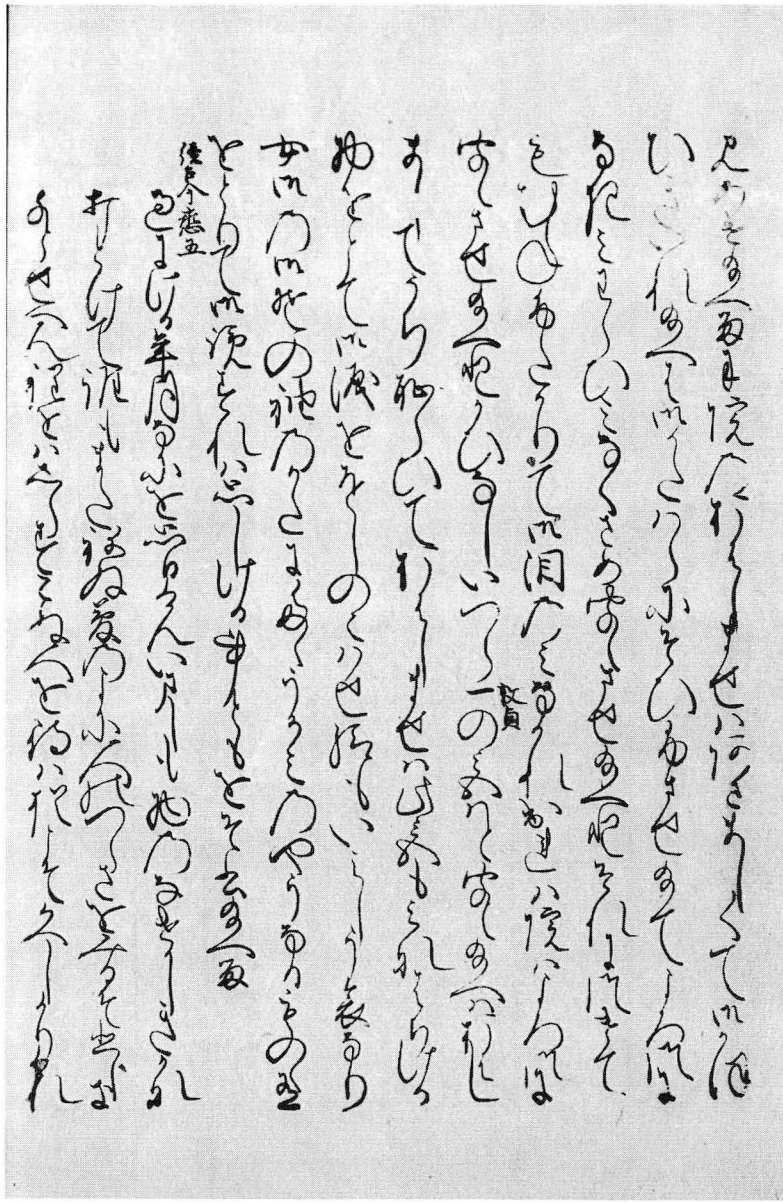


（二十七オ）



（二十七ウ）

（二十八オ）



（二十八ウ）

（二十九オ）

（二十九ウ）

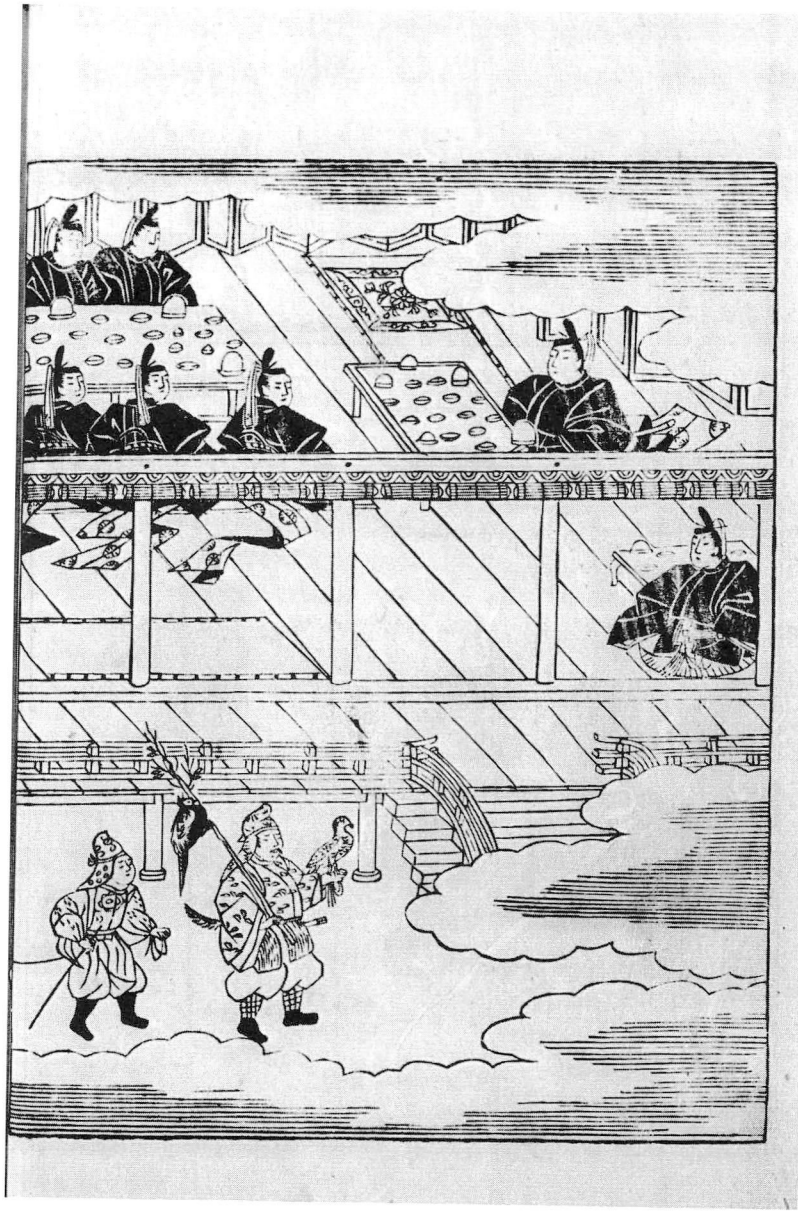
（三十オ）

（三十ウ）

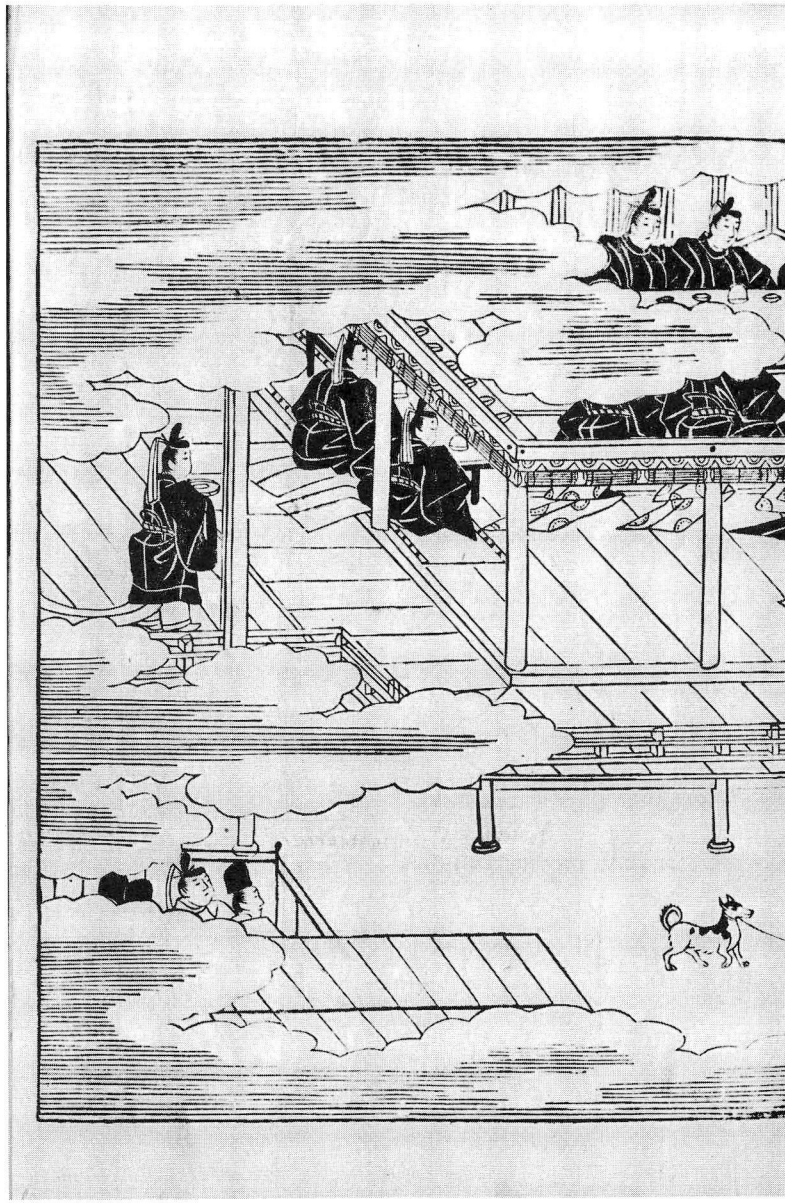
（三十一オ）

（三十一ウ）

（三十二オ）

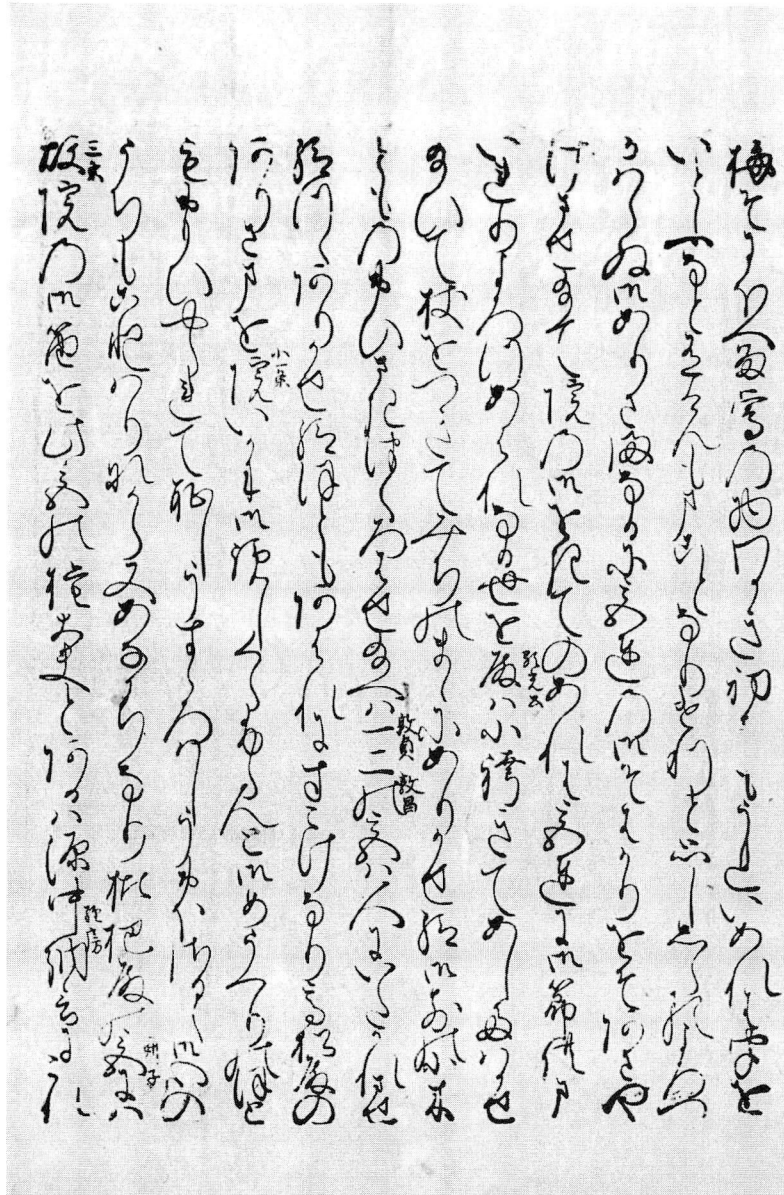


（三十二ウ）

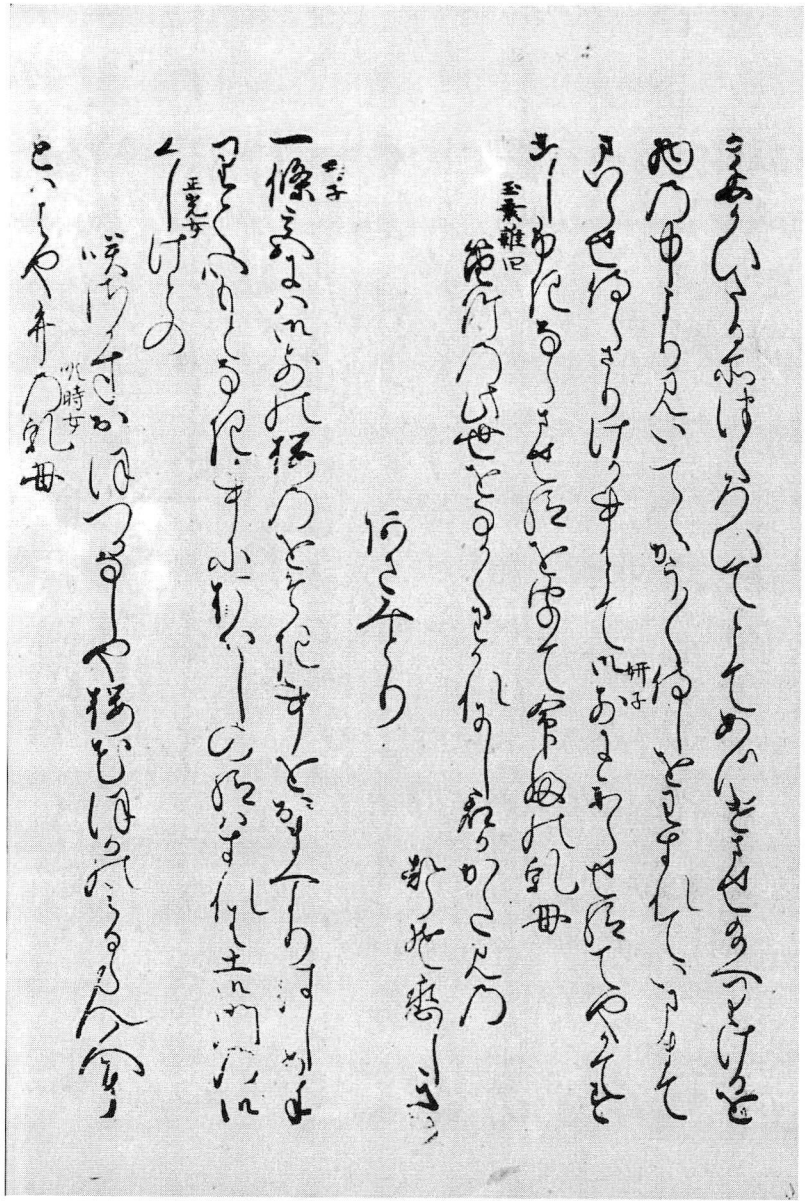


（三十三オ）

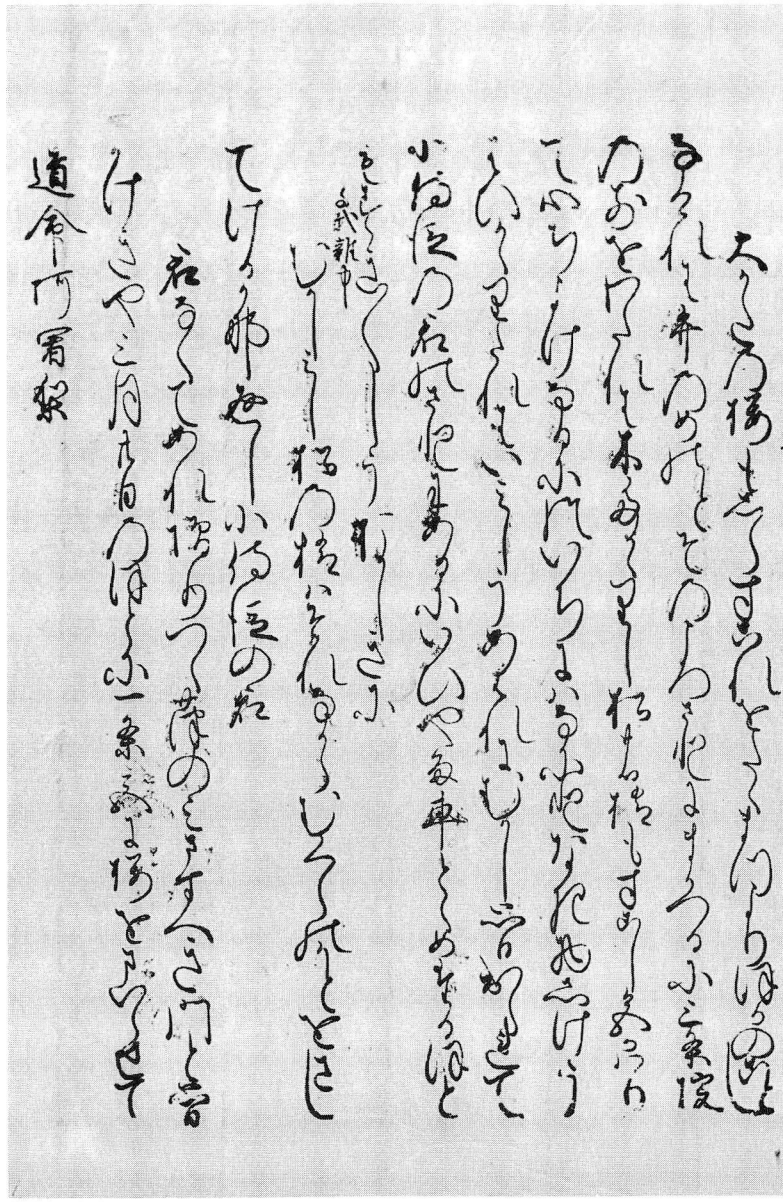
（三十三ウ）



（三十四オ）



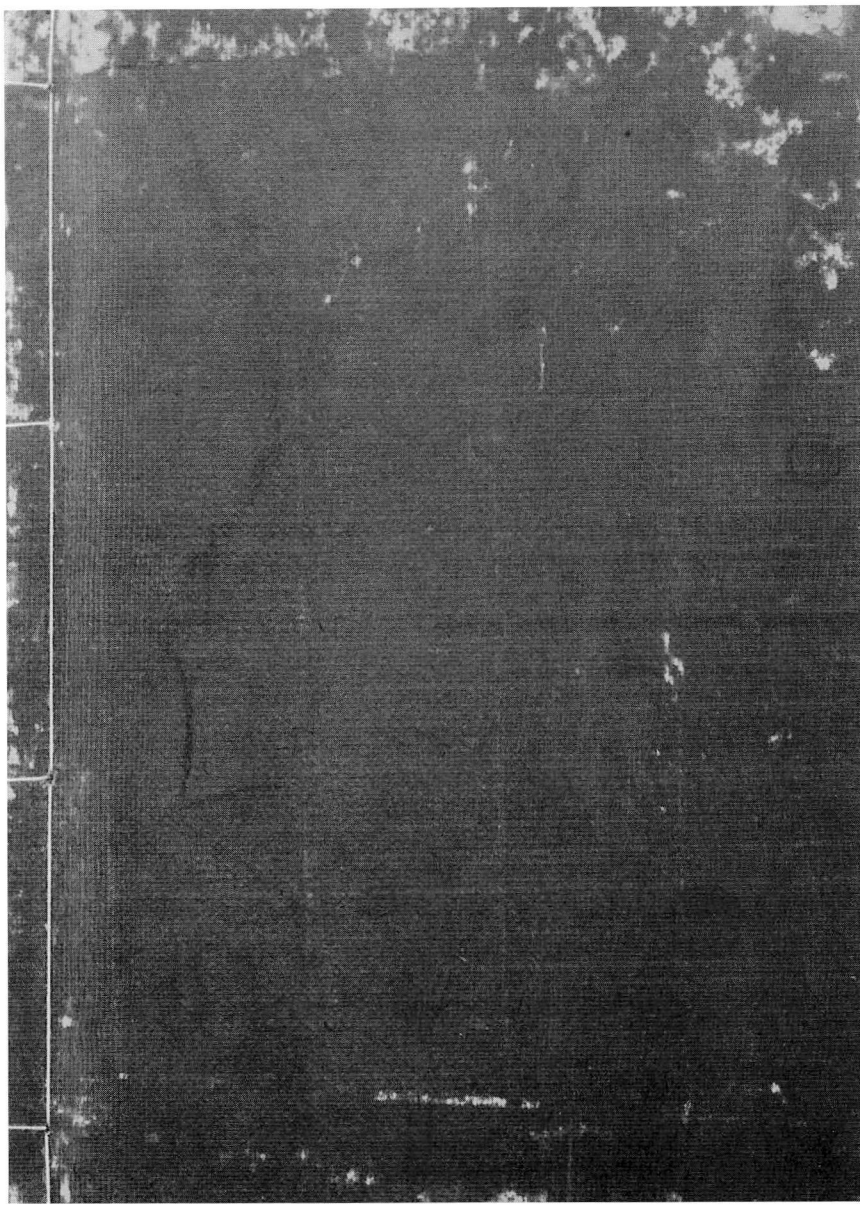
（三十四ウ）



（三十五オ）

（三十五ウ）

（後見返）



（後表紙）